

9

3

滿洲興業同志會  
委員長 伯爵

土方久元題字

伯爵大隈重信序 今井忠雄編著

# 東亞の 大寶庫 滿洲案内

全

東京 實業之日本社



海濤山麓

久元題

37 / 2





## 序

日露戦争は、我帝國の運命を定むる曠古未曾有の壯舉にして、其終局如何は豫め計る可らずと雖も、予は之を忠勇なる我陸海軍人に信賴して光榮ある戦勝を期するものなり、而して其戦勝の後、我同胞の碧血を濺ぎ平和の敵を驅逐したる滿洲の野を如何にすべきかに至りては、予が從來深く注意せし所にして、尙ほ國民と共に焦眉の緊急問題として研究せんと欲する所なり。蓋し我國は何が爲めに征露の軍を起せしか。又



何が故に數萬の同胞を犠牲とし幾億の財帑を  
擲ちしか、是に一に我帝國の興隆と發展とを期せ  
るが故のみ、此期する所を遂行せんと欲せば、國  
民は我滿洲軍の進行に従ひ着々として平和的  
經營をなすの覺悟なかる可らず。  
而して其經營たる、予は決して我國民の通有性  
たる依賴的根性を以て政府當局の行動にのみ  
倚賴するを好まず、須らく國民的活動に待つべ  
きものと信じて疑はざるなり。

頃者今井忠雄君「滿洲案内」を著はし、詳かに彼地

の天然人事を説き、進んで企業に資材を擧ぐ、是  
れ我國民をして滿洲の經營を指導し、予が所謂  
國民的活動を促すの一助となすに足る、想ふに  
之を讀むもの、蓋し益する所尠なからざるべし、  
需に應じ聊か茲に一言を題すと云爾。

伯爵大隈重信



# 序

極之南北。洋之西東。建國者大小數十。強暴有如秦楚。孱弱有如魯衛。形勢殆類於東周之時焉。故處其間而欲保其國。則兵不可以不强也。國不可以不富也。是事之急。雖庸人亦必知之矣。今我帝國屹立東瀛。疆域非極大。民人非極衆。然聖明在上。而臣民忠勇。前後十年之間。西懲滿清。北膺強露。天戈之所靡。草木無不風靡矣。以仁伐不仁。以義征不義。強兵之道。何以加之。若執此心。舉國一致。窮力理財。思戢以光國。豈有不富之理乎。有其理而其實不舉者。是有天而無人也。憂國之士當斯。



皇威赫揚之時。固宜督勵商工二業。以圖邦之富實。而全平和之戡克也。夫欲殲敵者。必不可不先搆其巢窟。欲得富者。必不可不先索其財源。而索之內地。不若索之滿韓之愈也。滿韓之爲財源。苟識今之勢者。皆必知之。韓猶門庭可入。而易窺。滿猶奧室。非有善導者。不能窮其細。是蓋所以今井氏之有此著也。且近聞之。其地之民。漸知聖旨之所在。而欲浴我鴻澤者。月日加多。國家崇仁義之驗。不亦明著乎。然則此書之出也。必有使洛陽紙價貴者矣。余亦竊樂聞之耳。

### 濱口吉右衛門識

## 凡例

- 一 本文中の貨幣、尺度、里程等は讀者の便に供せん爲め、悉く本邦に換算して記せり。
- 一 本書は日露戰爭中に執筆したるを以て、商業、航通等の滿洲に關する事項は、時に平素の例を以て律すべからざるものあり、是等は戰爭開始前の状態を引證して參考に供せり。
- 一 本書は内務省、外務省、農商務省、領事館、參謀本部、支那調査會等の報告に負ふ所尠ならず、謹んで之を謝す。



東亞の大寶庫 滿洲案内目次

第一章 東亞の一大寶庫(天和民族雄飛の好機)……………一

第二章 滿洲の面積人口(天和民族の來住を待つ)……………四

第三章 山の國、水の國(富源此裡に在り)……………七

第四章 四季の氣候(本邦人に適す)……………一九

第五章 多望なる地域(新日本の創建地)……………二六

第六章 遼東半島の都會(最も開化の地方)……………二九

    一 旅順口(東洋隨一の軍港)……………二九

    二 青泥窪(東洋隨一の商港)……………三三



三	金州(金州半島の要部)	四一
四	復州(近傍良嶺在り)	四二
五	蓋平(古の蓋平城)	四三
六	貔子窩(黃海岸の一良港)	四四
七	大孤山(遼東の要港)	四五
八	岫巖(大理石の産地)	四七
第七章 遼河流域の都會(盛京省の金庫)		
一	營口(滿洲唯一の開港場)	四八
二	田庄台(遼東灣の一要地)	五二
三	錦州(關外鐵路の大驛)	五二

四	海城(滿洲屈指の商業地)	五三
五	遼陽(滿漢韓の要衝)	五四
六	新民屯(滿蒙貿易上の要地)	五六
七	奉天(滿洲第一の貨物集散場)	五七
八	鐵嶺(奉天府の重鎮)	六〇
九	開原(元朝の開元路)	六一
十	法庫門(邊境十一門中最盛の地)	六二
十一	通江子(遼河の終航點)	六三
十二	昌圖(東遼河の大市街)	六三
十三	奉化(邊境門外の要地)	六四



第八章

鴨綠江流域の都會(滿韓の關係最も大)……………六四

一 鳳凰城(古來より名高し)……………六四

二 九連城(軍事上の要地)……………六六

三 大東溝(唯一の材木市場)……………六七

四 安東縣(鴨綠江畔の牛莊)……………七一

五 其他の都市(懷仁、通化、興京、新兵堡、寬甸)……………七八

第九章

松花江流域の都會(滿洲の母)……………八一

一 三姓(松花江下流の要市)……………八一

二 齊古塔(吉林省第二の大市場)……………八三

三 賓州(三姓、哈爾濱間の要市)……………八五

四 哈爾濱(産業的理想の大都市)……………八五

五 白彥蘇々(醸造業の中心)……………九〇

六 呼蘭(農耕業の中心)……………九一

七 伯都訥(松花江嫩江の連結地)……………九三

八 吉林(滿洲の中央市場)……………九四

九 阿勤楚喀(金朝の舊府)……………九五

十 長春(邊境門外最盛の貨物集散地)……………九六

十一 其他の都市(農安、懷德)……………九八

第十章

嫩江流域の都會(北滿洲の富源)……………九九

一 齊々哈爾(黑龍江省の首府)……………九九



二 墨爾根(嫩江航路の終點)……………一〇一

第十一章 黑龍江流域の都會(滿路の重要關係地)……………一〇一

一 愛琿(對露貿易の大市場)……………一〇一

二 薩哈連烏拉(愛琿の出張所)……………一〇三

三 海拉爾(黑龍江第二の商業地)……………一〇三

第十二章 圖們江流域の都會(滿韓露の要地)……………一〇四

一 琿春(滿洲東北方の咽喉)……………一〇五

第十三章 滿洲の重要關係地(宛然滿洲の出張所)……………一〇六

一 芝罘(遼東の貨物供給地)……………一〇六

二 天津(北清第一の貨物集散市場)……………一〇八

三 秦皇島(將來多望の新大貿易港)……………一一〇

第十四章 豐饒なる農作地(收穫の多き無類なり)……………一一四

第十五章 好望なる商品(我製品の好販路)……………一二〇

第十六章 盛大なる製造業(現今は燒酎と豆油)……………一二四

第十七章 豊富なる鑛脈(現今は殆んど死蔵)……………一二六

第十八章 無限の大森林(滿洲最大の富源)……………一二三

第十九章 鴨綠江の伐木事業(十六割の純益)……………一三九

第二十章 重要なる牧畜(廣大なる地積在り)……………一五一

第二十一章 漁業と狩獵(山水の産物亦豊富)……………一五三

第二十二章 滿洲對外國貿易(最優勝者は我日本)……………一五五



第二十三章 滿洲の金融機關(意想外の發達)……………一六二

第二十四章 滿洲の通貨(外來人の特に注意すべきもの)……………一六九

第二十五章 滿洲の尺度(錯雜混交を極む)……………一七五

第二十六章 滿洲の商店(仲買商と巨商と小賣商)……………一七七

第二十七章 滿洲向の我商品(製造販賣上の注意)……………一八一

第二十八章 商標名稱の撰擇(商品賣捌上の要訣)……………一九六

第二十九章 商品見本の携帶(實業視察上の捷徑)……………二〇一

第三十章 在牛莊帝國領事館(滿洲在留本邦人の保護者)……………二〇二

第三十一章 税關と税率(改定の新税率)……………二〇九

第三十二章 牛莊税關の手續(貨物輸出入上の要件)……………二三三

第三十三章 鐵道と驛名(東清及び榆營兩鐵道)……………二三七

第三十四章 水運と汽船(滿洲最便利の貨物運搬法)……………二四六

第三十五章 道路と里程(四通八達)……………二五一

第三十六章 郵便と電信(日清郵便差出心得)……………二七四

第三十七章 滿洲内地の貨物運賃(驚くべき低廉)……………二八一

第三十八章 滿洲の疾病(衛生上の注意)……………二九〇



附 録

第一 滿洲渡航の費用(東京より僅に三十圓)……………二九三

第二 滿洲旅行の心得(必要携帶品)……………三〇三

東亞の  
大寶庫  
滿洲案内目次終

今井忠雄編著

東亞の  
大寶庫  
滿洲案内

第一章 東亞の一大寶庫(大和民族雄飛の好機)

日露の戦争は何に原因して起りたる乎。巨億の軍資を擲ち、數拾萬の生命を賭し、露國と戦ふに到りたる日本帝國の眞意は那邊に在て存する乎。言ふ迄もなく世界の平和を恒久に保維すると同時に、又大和民族膨脹の進路を開拓せんとするに外ならざるは、今更繰り返すまでもなし。蓋し東亞の狀勢を觀察する者は、先づ日本の過剰なる人口が、絶へず朝鮮半島に對つて、流出しつゝあるの事實を見ると共に、又た極めて大なる膨脹力を有する我大和民族は、嘗に朝鮮



半島を自家の權威下に置くのみにて満足する能はず。更に進んで其大陸續きなる滿洲をも、自家の勢力圏たらしめずんば、自衛上甚だしき不利ある事實をも知ることを得ん。是東亞の舞臺に於て露國と衝突を避け得ざりし最大原因たりしなり。換言すれば日露戦争は、大和民族の膨脹せんとするに際し、前途に横はる障礙物を掃除するに在りしなり。是れ即ち自然の勢なり。

大和民族が膨脹の領域とし、新日本の建設地たらしむべき滿洲は抑も如何なる土地ぞ。

滿洲は日本に二倍半大の地域を有するも、其人口は僅々一千萬内外に過ぎずして、將來優に數千萬乃至一億以上の人口を抱擁し得るのみならず、未開の沃野は尙ほ甚だ廣大にして、耕農地たらしむべく、牧場たらしむべく。又た山は大森林に富み、礦物豊に、價值多き野

獸の夥しき。又川には種々の魚族棲める等、眞に東亞の一大寶庫たるを失はざるは、有識者の均しく認むる所にして、夙に露國が巨億の資を投じて、滿洲經營に熱注せし所以も亦偶然ならざるなり。

從來滿洲に在住する我國民は、明治二十七八年戦勝の賜物として、大に清國人の畏敬優待を受け、夫の跳梁暴虐到らざるなき馬賊にして、尙ほ且つ日本人には危害を加へざる事實は既に見聞すること屢々なり。況はんや今や、日露戦争に由て、日本帝國の威武更に發揮したるに於ては、我同胞の彼地に渡りて事業を企畫經營するに臨み、安全と便益多きや謂ふまでもなからん。

年々五十萬の人口を増加する日本帝國は、遠からずして六千萬と爲り、一億となるは蓋し當然のことなるに、翻て帝國の領土を觀れば、十年前臺灣を獲得したるを除いては、寸壤尺土と雖も曾て之を加へ



たることあらず。故に新方面を開拓し、新日本を建設するは獨り方  
今の急務とするに止まらず、既に軍人は戦争に依て、新たに東亞の  
大陸を開括せり。國民たるもの之と共に進し、滿洲をして工業通商航  
海の中心たらしめ、第二の日本を建設することは新興國々民の期待  
せざるべからざる所なり。

## 第二章 滿洲の面積人口（大和民族の來住を待つ）

滿洲は不規則なる三角形を爲し、西は内外蒙古に接し、東は烏蘇里  
河、松阿察河、興凱湖を以て露領沿海州に界し、南は圖們江及び鴨  
綠江を隔て、朝鮮に隣し、北は黒龍江を以て露領黒龍州に接し、西  
北は額爾古納河を以て露領後貝加爾州に界し、西南は黄海及び渤海  
に濱し、又長城を隔て、支那本部に接續す。其面積六萬三千六百六

十二方里にして、我國の約二倍半に當る。現今施政の便宜上よりし  
て、内蒙古の地を以て、滿洲の疆域に編入し、其他黄海の北部及び  
遼東灣の諸島を、其管轄に屬せしむ。

滿洲を區分して三省とす。最北なるを黒龍江省と呼び、中央なるを  
吉林省と稱へ、南方なるを盛京省と云ふ。人種は滿人、漢人、東干  
人、瓦爾喀人、索倫人、鄂魯春人、瑪涅克爾人、達瑚爾人、費牙喀  
人、滿渾人等にして、其合計は精確なる調査なきを以て知る能はざ  
るも、千九百三年の政家年鑑に依れば、八百五十萬と記され、埃匈  
國參謀大尉ヨセフ、シヨエーの調査する所は、約千二百萬人と  
推算し、其内約百五十萬は黒龍江省、五六百萬は吉林省、六百萬弱  
は盛京省之を占むと爲せり。又明治二十二年に公けにせられたる、  
參謀本部の調査に據れば、清國政府の編審せし戸口、及び各經歷者



の紀行報告を推算して、千二百萬と爲し、之を三省に區分すれば、盛京省八百萬、吉林省三百五十萬、黑龍江省五十萬と爲し、尙ほ晩近鴨綠江、圖們江等の水域即ち鳳凰城、甯古塔、琿春地方の如きは、支那本部より移住せる人民頗る夥多なりと雖ども、此等の移住民は所謂無籍の徒にして、清國政府の算入せざる所なれば、此の移民を加算すれば、千三百萬位とならんと云へり。今假りに滿洲の人口を千二百萬とするも、一方哩の人口は僅に三十三人に過ぎず、之を我四國九州を加へたる、本島の人口密度一方哩平均四百人に垂なんとするに比すれば、其稀薄なることを要せざる所にして、年々五十萬人内外の増進を爲せる、我國民膨脹の權域を爲すの價值充分なりとす。

蓋し我同胞の膨脹力が極めて大なるものあるは、夙に世人の知悉する所にして、明治の初年には三千萬内外なりしもの、今や既に四千萬の上に出て、此勢を以て推せば、五千萬となり、六千萬となり、七千萬、八千萬、一億となるは、蓋し當然のことにして、是等増加の人口は、最早内地に容るゝの餘地なくして、朝鮮に、滿洲に、將た西伯利亞に新天地開拓の舉に出でんことは、自然の趨勢と云ふべく、滾々として盡きざる富源を有する滿洲は、是等急激なる膨脹力を有する我國民の來り拓くを待ちつゝあるなり。

### 第三章 山の國、水の國（富源此裡に在り）

滿洲は山國にして復た水國なり。而して無盡なる富源は、此山、此水に由て涵養せらる。滿洲全部の山脈は、長白山、興安嶺の二大部より成り。長白山々脈は滿洲の東北より西南に走て、吉林、盛京の



八  
兩省を掩ひ。興安嶺山脈は西北より東南に向ひ、黒龍江省に蜿蜒す。此陰山々脈の東端より分岐する者松嶺山脈となりて盛京省に入り、長白、興安兩山脈の別働隊を形成せり。

長白山々脈は東亞の一大山脈にして、其最高峰は海拔一萬尺乃至一萬二千尺に及び、我富士山と雄を争ふ。長白の名は四時常に雪を戴き、長へに白さを以て之を表稱せしなり。長白山々脈より分岐するものに、小白山、完達山、長白山、千山の四支山脈あり。

▲小白山脈 は胡爾哈河と松花江の間を蜿蜒し、其本支脈に吉林、三姓、寧古塔の各市を抱擁し、山勢甚だ緩慢にして北西方に傾斜し、終に平原と一樣なるに至る。森林に富み、礦物を藏し、多くの野獸を棲はしめ、又肥沃豊饒なるを以て、移民地として好望なり。

▲完達山脈 は胡爾爾哈河と興凱湖の間を走り、黒龍江、烏蘇利江の合流點より黒龍江を踰へ、完達山となる。此山脈の北端黒龍江を越ゆる處は、總て檜樹の森林を以て覆ひ、其東部烏蘇利江に向へる部分は、殖民に便利なる土地多し。

▲長白山脈 は滿洲の南部に挺秀し、南は朝鮮の國界を爲し、又松花江、鴨綠江、圖們江の水源を爲す。而して黒林嶺、吉林哈達等の支脈を生む。吉林哈達支山脈は吉林連山と爲り、奉天府の北より吉林府の南に綿延し、更に東北より西南の方向に延び、松花江を超へて、小白山脈に接し。又一は西南に走りて盛京省に入り千山山脈と爲る。

▲天山々脈 は遼陽の南方に聳立し、其支阜に海城、蓋平、復州等の都會を造り、更に延びて金州半島となりて渤海に入り、再び



對岸の登州半島と爲る。

興安嶺山脈は長白山々脈と同じく、東亞の大山脈にして清國人の所謂外興安嶺是なり。興安嶺山脈は滿洲、蒙古より、露領後貝加爾、黒龍諸州に蜿蜒し、長さ八百里あり、北氷洋に流入する諸河と東太平洋に属する河流の分水界を爲す。山脈平均の高度は二千尺乃至三千尺なり。其中部及び東部は傾斜急峻にして谷底には、千古未融の氷田を擁す。支脈の滿洲に蔓延するものを興安、伊勒呼里山、小興安嶺の三とす。

▲興安嶺山脈は清國人の内興安嶺と呼ぶものなり。直隸省の北部に於て陰山々脈に接する海拉喀高山より起り、遼河水源を東北に奔走して内蒙古に入り、達爾爾河の水源に至り夫より黒龍江省に突入し、綽爾河と喀爾喀河の水源を分ち、穆克圖爾山となり、

雅克嶺に接す。雅克嶺より東は山勢弓形を爲し、嫩江の水線を圍繞し、別れて東興安嶺、西興安嶺となる。西興安嶺は黒龍江省の西部に在て嫩江と額爾古納河の間に磐礴し其北端は伊勒呼里山脈に連接す。興安嶺山脈は縦百六十餘里、横九十里乃至百里にして到る處叢林密樹を以て覆はれ、其峯頂は尖銳秀拔なるものなく、一望平坦なり。海拉爾河より諾敏河又は雅爾河等に到る數條の徑路は興安嶺山脈を横貫す。

▲伊勒呼里山脈は西興安嶺山脈の西北部なる伊克達河の地より起り、胡瑪爾河と額爾古納河の水源を北走し、什勒喀河と額爾古納河の會流點に達す。又支脈は東北して額穆爾河、旁烏河等の間を走り、黒龍江の右岸を充たし、西伯利亞に蔓延す。山勢高からず、森林繁茂し、野獸夥しく生息す。



▲小興安嶺山脈は清國人の東興安嶺と呼ぶものにして、長さ百六七十里北東より南西に蜿蜒す。滿洲に於て二山脈に并行し、南は松花江の右岸に至り、西は嫩江の左岸に達す。黒龍江省の東南部なる愛理、墨爾根等の城市を抱有す。他の支山脈と同じく森林、牧草に富む地多し。

盛京省に連亘する湖嶺山脈は、遼河水域の西方を占有し、峯嶺中四五千尺のものあり、山趾は直に海濱に臨めど、巖礁を爲すに非ず。沿岸は處々溪壑の地を爲し、殊に大凌河以東の如きは全く平坦なる土地なり。即ち此山脈は、直隸省の北方内蒙古の地より東南に奔波する陰山々脈の一支脈にして、盛京省に至り、千山々脈と對抗す。滿洲全地の水域を大別して、遼河、黒龍江、松花江及び支流たる嫩江と爲し。之に亞ぐを朝鮮の國界を爲す鴨綠江、圖們江とす。遼河

は遼東灣に入り、鴨綠江は黄海に注ぎ、松花江は黒龍江に合し、黒龍江は阿克哥海に流れ、圖們江は日本海に入る。遼河は開港場を有する唯一の大河にして、此河流に由り遼東の名、古來より高し。水域は内蒙古の東部及び盛京省の東南部を有し、遼東灣に於ける海運の便を掌握す。其上流に二派あり。西なるを西喇木倫河又は潢河若くは西遼河と稱し、東なるを赫爾蘇河又は東遼河と呼ぶ。東遼河は長白山の西北支脈なる庫爾諾山に發し西北流して赫爾蘇驛を過ぐるを以て、又之を河名とす。之より多くの小流を合し、赫爾蘇邊門を出て、昌圖の北を過ぎ西遼河と合す。西遼河は内蒙古に發し七老圖山脈を以て灤河の水域を分ち、夫より迂回曲折して數流を合し東遼河に合す。東西合したる遼河は盛京省に入り俗に巨流河と稱せらる。而して開原縣の西境を過ぎ、鐵嶺縣の西を横ぎ



一四  
り、盛京省の西北境を經過し、巨流河司の鎮驛を東す。此遼河水涸  
落の時は水面二十間に過ぎず。更に西南流して遼陽州の西境に入り  
渾河來り合す。渾河は支流中最大のものにして小遼河の名あり。之  
より水量大に増加し、勢ひ急となり營口より海に入る。全長總て百  
八十餘里あり。河口は西南の方位に向て開き幅六十餘間あり。西岸  
は沙泥より成りし淺洲にして長さ三里ありて蘆葦茂生し乾潮には全  
面露出す。東岸は總て卑濕の地にして曬鹽場と爲すに好適の地なり。  
鴨綠江は長白山の南麓に發し、朝鮮と滿洲の國境を劃す。水源より  
江口に至るまでに總滙する河川は數十の多さに上る。其主なるもの  
は盧川江、長津江、栗子河、佟佳河、璦河等なり、其佟佳河の會流  
する所より河身増大し、又璦河の會流する所より江流二派に分れ安  
東縣に到りて合す。此一嶼を江心と云ふ。之より更に西南に流下し、

一五  
大東溝の東約二漚の海に入る處には、江口に對し張島と名くる一島  
及び數個の石礁あり。此邊は江口より二里程の上流なり。水道の深  
さは朝鮮に瀕する所とす。鴨綠江の對岸にある朝鮮の重なる都邑は  
渭原、楚山、碧潼、昌城、義州、龍巖浦等なり。  
圖們江は滿韓露三國の境界線たれども、下流は韓露に隔てられ、滿  
洲より海に出づる直接の便を缺く。水源は長白山の東麓に發し、東  
流又東北流又南東流すること五十里餘にして小圖們江西南より來會  
す。更に數河を合せ屈曲北流して長白山支峯の東麓に至り、茂山の  
西北を經、平原中を橫流すること三十里、南より來る三水を受く。  
會寧、鐘城等の韓國都邑は南岸に濱す。又長白山支脈の南麓を繞り  
鴨綠里河を合せ水勢漸く増大す。穩城は其南對岸に在り。折て東南  
流し半圓形を爲し琿春の南に於て琿春河東北より來り會し、又東流



し、慶興の東北を経て日本海に入る。鴨里河は興安嶺山脈の支派より出て松花江に注ぐ胡爾哈河と水域を分界し、海蘭河等を合せて圖們江に入るなり。圖們江は穩城より海口迄二十里以西は河身淺狹なれども、慶興の附近は深廣にして幅四百間乃至六百間あり。其沿岸は地味肥沃、禾穀豊穰なるを以て移民逐年増加の傾向あり。松花江は滿洲全部の三分の二を領有し、滿洲の北部及び中部を灌漑す。滿洲名は松花鳥喇と呼ぶ、上流に二あり北なるを嫩江と云ひ南なるを本流とす。本流は長白上の北方に發し鴨綠江の水源は其北に在り。數多の河流を合せて吉林府に至り河身増大して六町餘と爲り、更に西北流して巴烟鄂布洛邊門を出て内蒙古に入り、伊通河を合せ、伯都訥の南を過ぎ北又稍東北流して嫩江の流れを受く。水源より總て二百六七十里あり。嫩江は源を伊勤呼里山の南西に發し、幾多の

支流を總匯し墨爾根の北を過ぎ齊々哈爾の西に至り折て東流し内蒙古に入り、伯都訥を北西に距る六七里の邊に於て松花江に會流す。嫩江を受けたる松花江は水量愈増大し、方向を東北に轉じ呼蘭の南に至り呼蘭河を合し、三姓の北に至ては右岸に胡爾哈河、左岸に巴藍河を受け水口十字形を爲す。三姓より下流尙ほ東北に進み水勢緩漫にして無數の沙洲を現はし黒龍江に合す。嫩江の會流點より此處まで三百二三十里あり。松花江、嫩江の沿岸は滿洲の倉廩と稱せらるゝ所にして、土地肥饒、穀物豊稔、又牧場多く製造業も盛なる地にして、滿洲の富を藏すること實に計り知るべからず。黒龍江は清露の境界を形成するものにして、其源流に二あり。一は露領の南に秀拔する綽功上山の北より發する因戈達河と、他は外蒙古の北部に蜿蜒せる肯特山より發する敖嫩河なり。此二流合して即



ち什勒喀となる。什勒喀河は其上流急湍にして且洲嶼多く、大なる舟を通ずる能はず。其左岸には千六百八十九年露清の境界を定むる條約を締結したる市府として歴史上有名なる尼布楚府あり。又本流の南部には銀、鉛、石炭等の鑛脈に富む。什勒喀河に會流する額爾古訥河は、肯特山に發する克魯倫河及び貝爾池より發する鄂爾順河等の呼倫池に總匯する諸川を受け、北流して清露兩國の境界を爲し其左岸に托羅海城あり。又和倫河、莫里爾肯河、烏羅布河、噶齊穆爾河等も額爾古訥河に會流す。

黒龍江は額爾古訥河及び什勒喀河を合流してよりの名稱にして、之より以下左岸は西伯利亞、右岸は滿洲なり。黒龍江の名稱に種々あり、露人はアムル江と云ひ、支那人は松花江と合流する所以下を混同江と名け、滿洲人は薩哈連烏拉と呼び、其他の土人間には什勒

喀河、滿可河、摩穆河等の名あり。黒龍江は凡そ二三十里毎に、形狀を種々に變化す。其中最も風景に富めるは、愛琿城の下流二三百里の間にして、青嶼白洲、江心に散布し、翠鳥の群を爲して飛翔する有様は、霸愁を慰め心自ら爽快なるを覺ゆ。松花江の黒龍江に會流する所は何れが本流なるや將た支流なるや判別に苦しむ程にて、滿洲人は黒龍江來て松花江に合すと爲せり。此會流點より以下、更に來會する河流は吉林省と沿海州の境界と爲す烏蘇利江とす。黒龍江は恰かも烏蘇利江の急流に壓迫せられし如く、之より方向を轉じて流下し海に入る。江口より數十里の間は江身濶く又波濤激怒し宛然海洋の如し。黒龍江の延長は總て八百餘里なりとす。

#### 第四章 四季の氣候（本邦人に適す）



滿洲の氣候は大陸的にして寒暑ともに嚴烈なりと雖も、本邦人及び歐米人の生活には、些かの障礙なし。但し此地に住む者は冬季暖爐には充分たる防寒衣の用意を怠るべからず。南部滿洲なる營口に於ては冬季時として、烈氏零下十九度に達することあれど。是等は稀有のことす。奉天より北方五十里の地にありては、十一月下旬烈氏零下二十度に達し、又奉天に於て、明治三十五年一月中、烈氏零下二十六度五に達せしことあり。以上の酷寒は例外にして、嘗て奉天に於て、一月中旬試みられたる左の度數を通例とす。

曉方戶外

午前十一時戶外

一月十五日 烈氏零下十四度

烈氏零下十一度

同 十六日 烈氏零下十二度

烈氏零下十度

北部滿洲は海邊との距離甚だしきと、且つは黒湖の恩恵を受くるこ

との減少より、寒氣一層酷烈にして又其期長し、而して初雪を見るは、十一月を以て例とす。北方興安嶺の西方に於ては、酷寒には烈氏零下三十度乃至四十度に達することありと云へるも、蓋し是等は滿洲に於ても、最も酷寒猛烈の土地なり。滿洲は冬季最も長く、夏季之に亞ぎ、春秋最も短し。寒暖許は四月に至れば、俄に上騰し初め、四月下旬より五月初に至れば、南部滿洲に於ては、既に植物の發生を見る。五月下半期に至れば、概して天氣晴朗にして、且つ氣候溫暖、曠漠無限の沃野幾千里は、草葉青々として、又峻烈の寒氣ありしを忘れしめ、一望神氣を爽快ならしむ。又西北隅地方に於ては、五月に至り尙ほ解雪せざる事あれど、六月初頃よりは、北部滿洲到る所、氣候俄に暖く、之に伴ひ植物も數日間に誠に信を置き難き程の發生を爲し、爲めに屢々驚かさ



ることあり。而して春より夏に移る際、氣候の變化著しきは、北部滿洲の西方を殊に甚しとす。然れども東部日本海附近に在る地方は、潮流の影響を受くるを以て、其變化甚しからず。滿洲の夏は興安嶺の溪谷等を除くの外は、一般に酷烈なり。南部滿洲は其南方に進むに従ひ、炎熱の度も之に伴ふ。併し其暑熱あるが故に、米、麻、藍等の栽培に最も好適す。營口、奉天に於ては、六月末、戸内烈氏二十六度乃至二十八度に達することあり。而して九月に至るまで、比較的高度の平均を保ち。北部滿洲に於ては、六月上旬より氣候溫度を呈し、七月上旬は其暑熱最も激しき季節なりとす。乍併是等の暑熱は、大抵午前十一時より午後三時までにして、之を除くの外は、旅行等に左程差支を來たす如きことなし。北部滿洲に於ては八月上半期より、暑熱漸々下降し始め、秋の到來

は割合に早し。時としては九月下旬松花江の北方、齊々哈爾近傍に於ては、落葉を見しことありと云ふ。然れども、又日中は暑熱耐へ難き程なるに、夜中は寒冷にして、朝には烈氏二度を示せるに、正午には戸外は三十一度と爲り、夜は零下三度に降下せしことありと云ふ。滿洲の秋は短期なりと雖も、一般に爽快なる時期なりとす。以上の例を綜合して考ふれば、滿洲は一般寒暑共に烈しく、北部に進み海岸より遠隔するに従ひ、益變化の度甚しく、且つ大陸的峻酷なる性質を有す。此重なる理由は、(一) 廣漠たる大原野の存在(二) 興安嶺(三) オコック海より露領黑龍州沿岸を経て、日本海を通過する、流氷の六月に至るも尙ほ絶へざる寒潮ある等の影響に由るなるべし。

奉天氣候十ヶ年平均表



最も暖かなりし年

最も寒かりし年

月	最高	最低	平均	最高	最低	平均	總平均
一月	三、七	△一四、五	△、七	△二、七	△二六、七	△一八、四	△一二、七
二月	二、二	△一、五	△二、九	△八、〇	△二五、二	△一六、四	△九、六
三月	一六、〇	△五、三	五、〇	三、二	△二八、一	△五、〇	〇
四月	二〇、一	四、五	一四、〇	九、一	△一、三	二、七	八、八
五月	二四、四	一一、六	一八、三	一二、〇	〇、三	七、五	一二、九
六月	二八、五	一七、三	二二、九	一六、八	八、八	一三、八	一七、八
七月	二八、四	一八、七	二五、三	一九、七	一四、四	一七、〇	一九、六
八月	二八、一	一八、一	二三、七	一九、七	七、四	一四、一	一八、九
九月	二四、三	一三、九	一九、三	一二、四	二、九	八、〇	一三、六
十月	一九、六	一、五	九、九	七、七	△四、〇	一、二	五、五
十一月	九、九	△一、三	三、四	四、七	△一七、三	△八、一	△二、三
十二月	六、七	△九、四	△二、七	△三、六	△二一、九	△二二、五	△七、六

(備考) 一、寒暖計は烈氏とす 二、△印は露點下を示す

降雨は四五月頃は極めて稀にして、其以後は大雨間断なく降り續

き、時としては連旬に亘る如きと珍らしからず。諸川溢溢して作物人畜に患害を及ぼすことあり。夫の千八百八十八年の如きは、四月より六月までは殆んど雨なく、六月より八月二日迄僅かに六回の雨あり、其後霖雨ありし爲め、人畜作物を流失する夥しく、區域三千方里に及べり。

之を要するに滿洲の氣候は、人の身體に不適當なることあらざるも、嚴寒の際には能く防寒の用意を爲し、又夏季太平洋定期風の干係により、霧多き地方及び霖雨の際、若くは夏季隆暑の日、急激に溫度低降する場合に於て、最も衛生に注意すべし。若し夏季旅行せんと欲せば、水分を透さざる外套を携へ、以て卑濕の毒を防ぐこと肝要なり。



## 第五章 多望なる地域（新日本の創建地）

我帝國の二倍半大を有する滿洲の地に於て、我進取的膨脹的國民が往きて、新日本街を形成し、新日本村を建つべき前途多望の地は、全土到る處に在り。長白山、興安嶺の兩大山脈が蜿蜒低下して平原を爲せる松花江、嫩江、黒龍江、遼河の沿岸の如き、平坦にして開豁なる土地は、實に東亞の一大寶庫たるに耻ぢざる、種々の物産を藏有し、農産物に、穀物に、將た森林に、天與の富源は一として之あらざるはなく、我國民雄飛の場所として遺憾なき所なり。想ふに従人世人の滿洲を觀る者、其人烟稀に、交通機關不便なるの故を以て、尙ほ偏へに支那本部、蒙古、西伯利亞、朝鮮の間に蟠窟せる極寒不毛の大曠野の如く想像せるもの多しと雖も、事實は決して然ら

ず。鐵道は未だ内地到る所に敷設せらるべき盛況に至らずと雖も、東清鐵道は優に滿洲の要部を連絡し、其是なき地方は、洋々たる河水流れて航運を容易にし、我國民の滿洲開發に従事する者をして些かの不便を感ぜしむるなし。

將來我國民の突進すべき多望なる都邑は、主として大河の流域に密集す。其詳細は後章に述ぶる所あれど、今其重なるものを各江の流域に由りて記せば、遼河流域は土地甚だ肥沃にして農耕牧畜盛に行はれ、粟、黍、豆類、罌粟、小麥、大麥、米、燕麥、馬鈴薯、煙草、綿、藍、菓物、羊、豕及び銀、銅、鐵、石炭等を首要産物とし、都邑には滿洲唯一の開港場たる營口即ち牛莊を始め、田庄臺、海城、遼陽、新民廳、鐵嶺、開原、法庫門、昌圖、奉化、通化子の外、清國祖先の首都たる奉天の大市街も亦此流域に位置し、盛京省に於け



る商業上、政治上の中心たり。次に松花江流域及び其分派たる嫩江流域は、滿洲に於て、最も豊沃なる土地を以て聞ゆ、就中松花江流域の如きは實に滿洲の倉庫たるの稱あり。其産物には遼河流域に揭げたるもの、外、阿片、砂金、材木等に富み、既に廣大なる地域開墾せられたるも、尙ほ耕作に適して而かも全く開墾外に放棄せられ居る地域も亦頗る廣大なり。此地方に於ける牛羊等家畜の數は百萬頭以上に及べども、尙ほ青草繁茂し牧場として好適の地にして、牧場たらざるもの亦多し。松花江、嫩江の兩流域には、滿洲中部及び北部即ち吉林黑龍江兩省の大市邑は殆んど抱合せらる。先づ吉林省より數ふれば首府吉林を始め長春、農安、懷德、伊通州、伯都訥、哈爾濱、阿勒楚喀、齊古塔、三姓あり。黑龍江省には首府齊齊哈爾を始め黑爾根、呼蘭、白彥蘇々の諸市邑之に臨み滿洲の倉庫を形成す。

鴨綠江流域には上流に長白山を頂き之に無限の大森林を藏し、下流には木材の唯一市場たる大東溝を始めとし、安東縣、鳳凰城、懷仁等あり。對岸の龍岸浦、義州、昌城、碧潼、楚山、渭原の諸市府と相俟て鴨綠江の天恵を頌つ。黑龍江流域は愛琿即ち黑龍江城、薩哈進烏拉ありて、露領ブラゴエチエンスク市と相對し、圖門江流域の琿春と共に、清露間陸路貿易上の要衝を占む。又是等の流域を除いて繁榮なる地には遼東半島在り。此處に位置する都邑には、旅順口、青泥窪、金州、復州、蓋平、貔子窩、大孤山等あり。

### 第六章 遼東半島の都會(最も開化の地方)

#### 一 旅順口(東洋隨一の軍港)



旅順口は丘陵重疊、四面を擁し、港内狭くして東西二部に分たる。東港は所謂軍港にして水深く、大小の艦船岸に横はるも、水域狭くして恰かも潜水船渠の如し。之に反し西港は廣濶にして、商港と爲すも敢て狹隘を感ずることなかるべしと雖も、水淺くして遠洋航行の汽船は、灣内に入るを得ざるを以て、東港と西港との中間に投錨す。陸地の方面には棧橋を設けて、貨物陸揚げの便利に供し、之に近接せる波止場には上屋を建築し、其背後には停車場より數條の鐵道を敷き、貨物の運搬を容易ならしむ。

商業は不活潑にして、陸海軍人と労働者の需要に供する物品を測ぐに止まるが如し、之れ從來旅順口の經營たる、商業上の目的に出づるに非ずして、主として軍事上の目的に依りたる、自然の結果と云ふべきなり。然れども當港には未だ税關の組織なく、出入貨物は絶

對的に自由なるを以て、近きは遼東半島、遠きは滿洲全土に頒配する貨物中、貴重品にして運搬に多額の費用を要せざるものは、當港より輸入せられ、其額も少なからずと云ふ。

日本の貿易商中、日露戦争前、旅順口に於て嶄然頭角を顯はし居たるものは、只三井物産合名會社の支店あるのみにて、他は十數軒の雜貨商ありしに過ぎず。三井物産會社の商業は、重に露國官用品の賣込み、及び石炭の販賣等にして、其他の雜貨商は、露人相手に本邦商業者の小賣を爲すに止まりたり。工場としては、海兵團に屬する鐵工場及び造船所ありしのみにて、私設工場としては見るべきものなし。

日露戦争前に於ては、司法行政の權總て露人の手裡に歸し、露語にあらざれば通ぜず、露貨にあらざれば其用を辨せず、遊覽者に對し



では、双眼鏡すら使用するの自由を與へず、公道と雖も小高き所に佇立して、風景の美を貪る者あれば、怪しき者として誰何せられ、露語を操りて辯解すること能はざるものは、嫌疑の廉を以て拘引せらるゝ如き、壓抑暴政、言語に絶せしなり、然れども今や此地我軍の占領に歸せんとす、將來我國の軍港として經營施設せらるべく、従て其市街には邦人の行も安全に業を營むを得るに至るべきなり。

## 二 青泥窪（東亞隨一の商港）

露國が東洋第一の商港たらしめんと企てたる青泥窪は、大連灣内の一澳なり、大連灣は金州地峽の南方にあり。灣首に三小澳あり。其南なるをピクトリア澳と云ひ、北なるを船澳と云ひ、其東南なるを手澳と云ふ。其陸岸は柳樹屯なる一市街あり、往年清國が軍港たら

しめんと計畫せし所にして、俗に大連灣と稱するは此地なり。大連灣は盛京省沿岸第一の良港にして、千八百六十年の役、英佛同盟軍が北京に逼るに當り、第一に占領せしは即ち此灣にして、暫く其兵を上陸せしめ、其軍隊を整頓し、以て北進の準備を爲せり。灣内南北四里、東西六里、直徑四里半あり。大連灣なる名稱は數灣連接の意より起りたるものなりと云ふ。此地は大氣清爽なるも淡水に乏しく、且つ村落中井水極めて少なし。前年英佛軍占據の時の如きも、占領後第一に井戸の開掘に着手したり。青泥窪はピクトリア澳に在り、遠く水を隔てて柳樹屯と相對す。青泥窪市と稱する地域は、千八百九十九年東清鐵道會社が、露國大藏省の命に依り、買収したる二十五箇村にして、其面積は實に七十五平方露里即ち我二十平方里なり。之を一市三郡に分つ。



(一) 青泥窪市 (東青泥窪、西青泥窪)

(二) 老鐵灘郡 (老虎灘、傅家庄、棒極泥、轉山頭、茨兒溝、大嶺 前の六村管轄)

(三) 沙河口郡 (北沙河口、南沙河口、三春柳、香爐礁北甸子、蔡山前、李家屯、下甸子、鄭家屯、黃家屯、尙家屯、馬欄屯、馬家套、小崗子、北崗子、南崗子、車家坨の十九村管轄)

初めて青泥窪に至る者は、何人も滿洲の地に斯の如き廣大なる街衢、整然たる都市の現在せるあるを見て驚かざるものあらざるべし。今より十年の昔、我國が三國の干渉により遼東半島を還附するや、露國の直ちに租借占據せるは即ち此地にして、一たび露國の租借地と變ずるや、露國は數千萬圓の資本を投じて本港の經營に着手し、小汽船二十餘隻、汽船二隻、機關車五臺及び工夫一萬五千人を督

し、日夜屹々として精勵の結果、築港工事大に進捗し、一哩に餘る三條の突堤は海上に突出し、又黃海の波濤を防ぎ、入港の船舶に安全なる錨地を與ふる爲めには、堅固なる防波堤あり。三條の突堤中、其一是専ら石炭船の繫留に供し、他の二は一般貨物及び旅客の昇降積卸に供する目的にして突堤兩側の水深は、干潮の時は二十八呎なるも、將來は尙三十四五呎にまで浚渫する計畫なりしなり。岸上と海中の聯絡を計る爲めには、數條の鐵道を敷設し、其線路に沿ひ數十の起重機を設置し、貨物積卸の便易を計れり。市街に充つべき地域は、頗る廣濶にして、數十萬の家屋を建築するも狹隘を感ずることなき程にて、海邊には運動場に充つべき地區あり、公園地の設備あり、上水道 (水源は市の西南黑蘭河) あり、電燈あり、其他官衙、官舎、旅館、銀行會社等の建築物は聯立櫛比し、



三六  
文明的市街として必要たる諸機關は悉く設備せられざるはなく、又將來商業の中心たるべき地區には、圓形の大廣場を設け、各種の商業機關は其周圍に建設することとせり。而して此大廣場より市街の各隅に通ずる道路は十條ありて、何れも廣濶坦々として清潔なり。東清鐵道は南關嶺より分岐して灣頭に達し、本港と哈爾濱、更に進んては歐羅巴露西亞との連絡を計る。日露戦争起るや、露國は數千萬圓の資本を投じ、多年の苦心を重ねたる港灣と市街とを捨て、我國に附せざるべからざる運命に逢ひしが、流石斯の巨大の富と文明の利器とを擧げて、其儘我に鬪斗付にするを遺憾とするに堪へず、其鐵道を破壊し、其水道を壊崩し、重なる建築物を能ふだけ灰燼と爲し、動産一切を齎して去り、加ふるに我軍の未だ此地に着せざりし以前には、馬賊は市街を思ふが儘に荒したるを以て、東洋第一の

商港も、一時は荒寥寂莫たるものに變じ、焼け残れる斷礎碎瓦、半ば焦げたる器具木片等道路に狼藉し、殆んど足の踏むべきなく、烟塵漠々として天に迷ひ、光景悲惨悽愴の極なりしが、一たび我軍の占領に歸するや、直ちに軍政署を置き、先づ市街の掃除に着手し、鐵道、水道等を始め種々の機關の修理を爲したるを以て、茲に青泥窪は再び罹災前の躰裁を幾分か回復するに至れり。我軍の占領當時、未だ旅順口の陥落せざるに當て本邦商人にして一攫千金の暴利を夢想し、此地に密航し來りしもの數百人の多きに達したりしが、何れも空しく追還せられたり。然れども或時期を経過すれば、本邦人の青泥窪に來て諸種の事業に着手することは、無論許さるべきのみならず、寧ろ保護獎勵せらるべきは必然にして、現に戰爭中我軍の使したりし東清鐵道會社、青泥窪俱樂部、露西亞ホテル、築港事務



所、警察署、官舎等建物の多くは内地人に貸下ぐる方針なりと云へり。

從來青泥窪に在りたる露西亞人は、悉く市井無頼の徒輩にして、其資力は皆支那の富豪に仰ぎて事業を經營せり。而して其金主は、張某、劉某、郭某の三人にして、彼等は何れも露國政府の御用商人なり。殆んど總べての土木工事は彼等の受負を以て爲せるものにして、彼等は一方には露國政府の御用商人として巨利を占め、他面には露西人の債權者として高利を貪り、榮華を擅にしけるが、我軍の占領前馬賊の爲めに殺害せられ、張某の雜貨店の如きは今や我軍の兵站監部となれり。

露國が青泥窪を租借するや、管下の二十五箇村に方長二名を置き、其下に毎村一名の村長を置けり、我軍政署は其儘之を存じ、只方長

を會首の舊名に改めたり。會首、村長皆名譽職なり。露國の賦課せる青泥窪の營業税は、四圓を最高とし三圓二圓一圓と一圓下りにて四等に分別し、其賦課の標準は一に稅吏の認定にあるを以て頗る不公平を極めたり。又此外に雇人税を課せり。即ち雇人一名に付四十錢を賦課し、土木受負者には其雇人一名に付特に七十錢を賦課せり。明治三十六年末に於ける調査に依れば、青泥窪の人口は三萬四百四十一人にして、其内譯は本邦人三百四十六人、露國人三千百十三人、最も多きは支那人にして其數二萬七千餘人ありたり。支那街には公議會と稱し、恰かも市會と商業會議所とを兼ねる如き權限を有し總ての町政を議決する自治機關あり、茲に公選したる總班三人を置く。又支那街には巡捕廳を置き二十二人の巡捕を雇へり、巡捕の上に巡捕頭二人あり、更に之を總ぶるの巡捕總頭を以てし、月給は巡捕總



頭五十圓、巡捕頭各二十圓、巡捕は一等二等の階級ありて、一等は十五圓、二等は十二圓を支給せり。彼等は從來露政府の下に立ち、盛んに賄賂を貪り居たるに、一たび日本軍政署の嚴刻なる監督の下に立つや、定額の月給以外何等收入を得る能はざるを以て、頗る不平の色ありと云ふ、支那街には料理店、洋品雜貨店、洋服店、西洋料理店、理髮店、洗湯等普通の需要を充すに足るべきもの略ぼ備はれり。

從來教育機關の不完全なりしは驚く程にて、唯露語を教ふる一の小學校あり。男女二名の教師之が教授となり生徒は僅に露國人十名支那人二名ありしのみなり。又商業學校を設けんとて建築僅に其緒に就きたるも、今回戰禍に罹れり。又た教會堂の外二個の禮拜堂ありて何れも規模宏壯を極はむ。

氣候は夏は内地より涼しきも、冬は嚴冽なり。八月の頃は日中九十度を上らず、加ふるに海面より吹く風は斷へず涼を齎して暑熱を忘れしむ。夜に至れば涼氣殆んど内地中秋の氣候の如し。

### 三 金州(金州半島の要部)

盛京省の西南に當り、蜿蜒として遠く直隸海峽に突出し、宛然北京の關門をなし、直隸灣の門扉を形成せるもの、是を金州半島となし。半島中古來より最も繁華なる地を金州となす。金州市街は半島の細頸部に位置す。應城は四角形に築造され、一面の長さ約九丁三十餘間あり、四面各一門を設けて城内に出入するを得、所謂平城にして地極めて平坦、加ふるに城外濠溝を設けず。市街の人口は約三萬にして、大賈巨商多く、取引の重なる商品は、



雜貨、雜穀にして、又南清地方より輸入せらるゝものは、木綿織物、砂糖、紙類、廣東雜貨最も多く、此地より輸出せらるゝものは高粱、豆油、蘇油、豆粕等なり。

應城より西すれば十五町にて、金州灣の海岸に出るを得、南すれば三十餘町にて大連灣の海岸に達す。又老赫山東に聳へ、堊山の阜丘低く連なり、應城を距る十四五町の東に蜿蜒せり。又一帶の河流は應城の北に横はり、一帶の阜丘更に其北に併列し、西南に玉皇廟、五嶺子山あり、是等の山河は、應城屈強の天然的防衛なり。金州には東清鐵道の停車場あり。

#### 四 復州(近傍良鐵あり)

復州は旅順、奉天間の一大市街なれども、東清鐵道は此處を横切ら

ず。州城は長方形を爲し、城壁の高さ三十尺、四隅に樓閣あり、周圍二十四町あり。北南東に一門を置き、城内に丁字形の市街あり。城外の東南にある一丘は南關塔寺と稱する古刹あり、塔頭高く中空に聳へ、遠方より復州に来るもの、目標と爲る。人口約二萬七八千、城外に住する者は十分の一に過ぎずして、多くは城内に住す。七八里の海岸に、頗る豊富なる石炭坑あり、復州河により輸送し來る。商業の繁盛は蓋平に譲らざるも、多くは地方産物の賣買に過ぎず。

#### 五 蓋平(古の蓋州城)

蓋平は遼東半島中の大市街にして、東清鐵道の停車場あり。地形は東南に茫々たる曠野を望み、北は凡そ四町にして丘岡に掩はれ、西



南二里餘にして蓋州河口に至る。河口に一埠頭ありて、蓋州市街の繁榮を資く。

人口三萬と稱す。巨商大賈多く、各種の貨物充實し、取引も活潑なり。

縣城は即ち古の蓋州城にして、長方形を爲し、南北の長さ七丁餘、東西五丁餘、城壁堅牢其高さ三十尺、城内には數條の街衢縱横に通じ、住民の五分の四は城内に居を構へ、其殘部は城外南東部に在りて、一市街を爲せり。

### 六 貔子窩(黄海岸の一良港)

貔子窩は盛京省の黄海岸に於て、大孤山に亞ぐ良港とす。金州を去る二十五里の所にあり。港口は東南に面し、滿潮の時は海水直に

市街に通じ舟楫を繋ぐを得べきも、退潮に際しては、四海里以上の沙澗を現はすを以て、大船は皆六海里以外の地點に投錨す。前面に小島大島散列し、馬鞍島、裏長山列島、光祿島等ありて、波浪を防ぐに良し。

人口一萬を有し、市街は海邊に沿ひ、東西に長し。貨物常に輻輳し、之より滿洲内地の各都邑に輸送す。住民は山東山西兩省より移住せる者多く、雜穀、雜貨、質舗の大店を見る。

### 七 大孤山(遼東の要港)

大孤山は貔子窩に優る良港にして、盛京省の黄海岸、旅順口岬と鴨綠江口間の中央に位置す。海岸より大洋河を上ること六海里にして、懸岩の突兀たる二峯ありて、大孤山と稱す。之此港に名くる所



なり、大東溝、金州、岫巖、鳳凰城に到る四條の道路あり、商業上軍事上甚だ價値ある港灣なり。市街は大孤山の南麓にありて、東南は大洋河に濱し、人口一萬五千あり。大洋河の流れは沙洲多く、小船は自由に航通し得れども、大船は河口外六海里なる爐島の南に碇泊するを常とす。商業の隆盛なること稀に見る所にして、滿洲北部より産出する貨物にして、朝鮮國境より來るものは、材木と云ひ、大豆と云ひ、高粱と云ひ、若くは燒酎、藍、綿花、鹹魚等皆大孤山居住商人の手を経て、南清地方に輸出せられしが、近來に來り大東溝、安東縣の發達するに従ひ、稍々其の商勢を減殺せらるゝに至れり。此の地は今より百二十年前に開かれたるものにして、山西、山東、廣東の商人は此地に支店を有する者多し。

## 八 岫巖 (大理石の産地)

大孤山港より北進すること十八里餘にして、一の繁華なる市街あり、岫巖即ち是なり。此邊一帶の地は、彼の有名なる岫巖石と名くる大理石の産地なるを以て、石造家屋甚だ多く、且つ加工して諸種の器具と爲し販賣する者多し。人口約一萬あり、商業も相應に繁昌す。市街は城外に在りて長さ十五六町、又之と直角を爲す數條の横路あり、城内は官衙、官舎及び労働者の類、之に住み、富者は悉く城外に居住す。城は長方形にして、大洋河其西北を繞り、對岸二十町を隔て、山丘の起伏せるあり、此處より大孤山に通ず。



## 第七章 遼河流域の都會（盛京省の金庫）

四八

### 一 營口（滿洲唯一の開港場）

營口は俗に牛莊と呼べども、牛莊は牛莊城の所在地にして、營口の上流更に數里の所にあり。營口は滿洲唯一の開港場にして、茲に貿易場を開始せしは、千八百六十年英佛聯合軍が北京城下の盟を爲さしめたるに起因す。海港は通じて營子と稱し、遼河口を遡る八里の所にあり。六十年前迄は、高粱の間に數軒の矮屋ある一小寒村に過ぎざりしに、今や人口八萬に達せり。市街は長さ約二里、巾十町乃至一里弱にして、遼河の流に沿ふ。港内水深く五尋乃至十尋に及び、又河幅廣く、大小の汽船順序正しく投錨すれば、五百艘を容るゝも尙ほ狹隘を感せず。汽船は二三千噸のものと雖も、潮時を窺ひ入港

して、遼河の中流に投することを得。

市街は東西二區に分たれ、中央なる關帝廟以西は蓋平縣に屬し、其以東は海城縣の管轄とす。廟より天后宮に至る街衢は最も整齊し、商業繁華の區なり。居民は廣東、山東、福建等より蟬集し、廣東人最も勢力あり。此地には帝國領事館及び帝國郵便局あり。氣候は天津に比し稍寒冷なり。遼河は毎年十一月末には氷塊浮沈し、航行稍危険と爲り、十二月上旬には全く結氷す、嚴冬の時は氷の厚さ一尺七八寸乃至二尺五六寸に及び、四月上旬に至り融解す。冬季封河の候に至れば、居民の過半は其郷里に歸り、在住民は只管開河を待ち、絶へて著しき買賣なし。製造營業に従事する土地は、一帶の泥原にして、美觀を添ふべき天然の樹林丘陵あるなく、唯遼河濁流の平原間を繁曲迂回するを見るのみ。地に井水なく、且つ河水も鹽分を含



み、飲料と爲すに足らず、土人は雨水を貯ふるため、所々の空地に水溜を造ること多し。

營口が短期間に現今の如き繁榮の市街と爲りたるは、實に遼河の資なり。河岸は絶へず數千艘の船舶幅濶し、毎年開港中、内地必要の日常品を載せ上流に遡るもの、又大豆其他の滿洲産物を載せ河を下るもの一艘大概八回の往復を爲す。今是等船舶を一萬艘とし、一艘の積載量を十噸と假定し、八回往復するものとせば、合計百六十萬噸の貨物は、遼河に依て集散せらるゝなり。諸外國との貿易は年々に進歩す。最近五年間のものを比較せば

外國より輸入	一八九七年	一九〇一年
支那各港より輸入	一、六四一、四一五	四、二九三、七三七
輸入合計	一〇、九八七、〇一三	一九、三二九、七二三
輸出合計	一二、六二八、四二八	二二、六二二、四六〇

外國へ輸出 五、五四二、八三八 七、三〇三、〇八六  
 支那各港へ輸出 八、二六五、七七四 一一、四三九、一三四

輸出品は豆類、豆油、蓖麻子油、豆粕、柞蠶糸、麻苧、藥材、胡麻子、獸皮、獸骨、毛皮を重なるものとし、輸入品は綿布、綿糸、麥酒、鈕釦、紙卷煙草、時計、石炭、洋燈、燐寸、鏡、石鹼、玩具、洋傘等にして、本邦製の雜貨は、逐年其販路を擴張す。日本の牛莊に於ける貿易上の地位は、最も優勢なり。即ち左の如し。

日本より輸入	輸入全體の割合	日本へ輸出	輸出全體の割合
一八九七年	二〇八、四七六	一九〇一年	一、六七四、二二四
一九〇一年	一、六七四、二二四	日本より輸入	輸入全體の割合
	一割七分一厘	支那各港より輸入	輸入全體の割合
	五、〇七九、二二六	輸出合計	輸出全體の割合
	三割八分九厘	日本へ輸出	輸出全體の割合
	六、五六二、二二七	支那各港へ輸出	輸出全體の割合
	九割一分五厘	輸出合計	輸出全體の割合
	九割〇二厘		

由是觀之、營口の貿易は、國內各港との貿易にして、外國貿易にありては、獨り我國が重大なる關係を有せしに止まりしが、將來滿洲



の發達する從ふては、英米諸國との貿易も亦、漸々發達し來るは必然にして、取りも直さず、本邦の勁敵となるものなり。

## 二 田庄臺（遼東灣の一要地）

田庄臺は遼河の右岸に沿ひ併行する一市街なり。人口凡そ二萬五千を有し、水陸の要衝にして、商賈繁華の地點なり。水路は新民廳、遼陽、鐵嶺の諸市に通じ、陸路は山海關より遼東半島に至る要地にして、又吉林、里龍江の兩省及び內蒙古の諸貨物を集散す。巨商は油房、穀舖、錢舖、當舖、皮舖、旅舍等を重なるものとし、集散の貨物は高粱、大豆、阿片、煙草を大宗とす。

## 三 錦州（關外鐵路の大驛）

錦州は漢滿の境たる山海關を経て、奉天に至る榆營鐵道俗に云ふ關外鐵道線中第一の都會にして、人口七萬あり。家屋は宏大櫛比し、巨商多く、石油、綿糸、砂糖、煙草の輸入品、豆、人參、毛皮の輸出品等盛に取引せらる。其繁華なることは、盛京省内、奉天府に亞げる都會たるに耻ぢず。府域は長方形を爲し、東西六町、南北九町あり、北門を鎮北と云ひ、南門を永安と名く、周圍には外濠を繞し、以て防衛に備ふ。

## 四 海城（滿洲屈指の商業地）

海城は奉天より金州半島に至る間の一都會にして、人口凡そ一萬二千、東清鐵道の停車場あり。地形は平坦にして、東北の一帶は、山脈を隔つる三十町乃至一里餘、西南は海州河に接し、對岸は蒼茫た



る曠野にして、眼界を遮るものなく、且つ近傍の耕地は頗る豊沃なるを以て、禾穀の收穫多し。南すること數里にして八里河なる一驛あり、營口と蓋平に至る道路の分岐點なり。

縣城は方形に造られ、周圍凡そ一里餘、城壁の高さ三丈四尺、各面一門を設け、中に十字形の市街あり。店軒聯列、街道又清潔、城廓の完備せるは、滿洲各城中、他に其類なし。城地の規模は、之を遼陽に比し、稍小なれども、商業の盛大なるは其右に出づ。是地勢の要點を占むるを以てなり。商賈の多くは城内に在り。

### 五 遼 陽（滿漢韓の要衝）

遼陽の市街は、遼河の流域なる平野の中央にあり。東北南の三方は、遠く重疊たる山岳を望むも、西北は茫々たる沃野展開して限りを見

ず。西南は營口、旅順に至り、南は鳳凰城を経て朝鮮に通ずる要衝の地たり、奉天を距ること十五里、營口に二十七里、旅順に百六里、朝鮮國境に五十二里なり。縣城は太子河の流れを帯び、長方形に築造さる。周圍凡そ二里、四面に六門あり、東門の一を高麗門と云ひ、朝鮮街道に當る。人口二萬五千、東西に通ずる一大街は最も繁盛なり。遼陽は水運能く、又近傍は耕作牧畜に適し、且つ銀鑛、石炭鑛多し。各商店の門前に掲げられたる、招牌及び標柱は、頗る宏大なるものにして、宛然大華表の如く、外來人をして一驚を喫せしむ。此地は要衝を占むるを以て、日清戦争、日露戦争ともに、其名を呼ばるゝこと高かりし。



## 六 新民屯（滿蒙貿易上の要地）

北京、奉天の本街道に當り、繁華なる一商業地なり、新民屯と呼ぶ。市街は遼河の左岸にありて人口三萬を有す、蒙古より羊豚、毛皮、乾酪來り、齊々哈爾より毛皮、沙金來り、雜貨は營口より來り、此處にて取引せらる。市中には兩替店、雜穀店、醸造店の大なるもの多し。

又二里餘を隔て遼河の沿岸に、後寬泡子と稱する一碼頭あり。諸種の貨物を載せて、營口及び其上流間を往來する船舶は、常に此碼頭に碇泊するを以て、新民屯と後寬泡子間は、人馬絡驛として絶へず。更に又、江を渉り一里餘にして、大民屯に至る、此地は人口五千を有し、日需品の新民廳より轉輸せらるゝもの多し。

新民屯は常に北京奉天間の要路に當るのみならず、綿糸、石油、洋傘等の、蒙古に入るものは、皆此地を経過する故、商況活潑なり。

## 七 奉天（滿洲第一の貨物集散場）

奉天府は清廷の留都にして、盛京省の首府たると共に、復た滿洲第一の要都なり。北京を距ること百七十五里なり、東清鐵道の「モクデン」停車場より約三里にして、奉天城に達すべく、更に同鐵道に由り北進すれば、哈爾濱に到り、南下すれば大石橋停車場より其支線に由り、營口停車場を経て北京に至るを得。「モクデン」とは盛字の意にして、清朝の祖先、努爾哈赤の興京より移りて都したる瀋陽城即ち是なり。

府城の規模は、北京に及ばずと雖も、結構壯麗なることは、河帝の



留都たるに耻ぢず、城壁は方形堡にして、周圍十里ありと云ふ、一面の幅凡そ十一町、各面に大小二門を開き通計八門あり。門樓及び四個の凸角に備へたる方形突出部の外は、一も側防部を設けず、其内部は壁面直在して、殆んど垂直線に近く、外部は稍傾斜せしめ、又壁上の雨水を流下せしむる爲めに、特に壁面に孔穴を穿てり。城内に二個の樓閣あり、東なるは鐘樓にして、西なるを鼓樓とす。城の外周又遠く土壁を繞らし、以て二重の備とせり、此土壁は高さ二間餘、厚さ三尺餘あり。

城中の南方に宮殿あり、其近傍十二個の衙門を置く。將軍、副都統、戸部、禮部、兵部、刑部、工部、府尹、道臺、學院、軍糧府、承德縣知縣等の衙門即ち是なり。又別に八旗、綠營、練軍等の兵營あり。戸數約五萬許り、人口二十五萬と稱せり。商業は滿洲第一の大消費

地たると同時に、又滿洲内部に對する、貨物集散場にして、商家は類を以て集まり、豪賈富商、壯麗なる店舖を構へ、其繁盛にして殷富なること滿洲に冠絶せり。而して是等の距離は多く外關市街に在り。市街は北京に比すれば、稍清潔にして、民俗華麗を好むの風あり。宗教は佛教徒最も多く、回々教徒之に亞ぐ、又南門外に天主堂あり。

物價は總て北京よりも低廉なり、山東、山西、直隸、湖北、浙江各省の商人多く入込み、南門外には回々教徒の開設する牛肉街なるものあり、毎日多數の生牛を屠る。又皮貨局なる商舖三十戸許りありて、多くの獸皮を賣買す。金巾、燐寸、石油、洋鐵の如き、輸入品の需要なく盛んにして、本邦製品も亦少なからず。

奉天府より朝鮮に至るの道路は、從來兩國間の申合せにより、成る



六〇  
べく鎖國の方針を執り、官吏の往復を除く外、兩國人民の交通を杜塞し、以て國境の警備を嚴にするの趣意なりしより、道路の險惡を以て却て得策とせしが如き觀あり、隨て行旅の難、想像の及ばざるものありと云ふ。

天柱山は盛京省中に冠たる勝區にして、府の東方四里の處に在り。全山翁鬱として老樹密林を以て掩はれ、他の亢山赭嶺に似ず、東南の山麓には渾河の水清く、一帶滔々として之を繞る、風光誠に明媚の地たり。

### 八 鐵 嶺(奉天府の重鎮)

鐵嶺は奉天府の東北凡そ十五里の所にありて、奉天府の重鎮たるべき要地なり。途上八里にある懿路驛には、石炭鑛あり。古來遼河の

水域は、此地を以て北端とし、北方滿洲より遼東灣に輸出する貨物は、此處まで陸送せられ、更に水路に轉換せらるゝ地なりしを以て、百貨輻湊、商業繁盛なりしが、今は其上流通江子まで、航路を開くに至りしを以て、稍其繁榮を奪はれたり。

市街は水路の要衝たるのみならず、奉天、吉林、伯都訥間の要地なり。人口は三萬を有し、遼河に臨む一大村馬風口は、此地の關門にして、運搬の貨物は皆茲に揚卸す。城廓は周圍二十四町、市街の規模狹少、家屋稠密、熱鬧なる市は、城の東方に在り。東清鐵道の停車場は、城の西門外に設けられ、構造大なる二等停車場なり。

### 九 開 原(元朝の開元路)

開原は昌圖より鐵嶺に達する通路に當る一都會にして、奉天吉林間



の本道を距る二里餘の所にあり。元の開元路即ち是なり。人口三萬五千。商業可なり繁榮。縣城は周圍二里、城壁の高さ三丈五尺、鐵嶺に比し規模大なり。

西北は丘陵に接し、西南の一方開豁、近く清河を帶び內蒙古に達する要地なり。

### 十 法庫門（邊牆十一門中最盛の地）

法庫門は邊牆に設けたる十一門の一なり。人口二萬。滿蒙陸路貿易の要區にして、蒙古より來る牛馬騾、及齊々哈爾より來る毛皮、煙草、砂金、嫩江より來る乾魚は此地を経て新民廳に送り。新民廳より來る綿糸、石油、洋傘、燐寸、玻璃器等は、此地より蒙古に輸送す。故に市況活潑なり。

西北に法庫山あり、丘陵起伏して遼河江岸に達す。南は奉天、營口北は吉林、黑龍江二省の各都に通ず。

### 十一 通江子（遼河の終航點）

現今遼河の最北端たる市街を通江子とす。遼河に浮べる萬餘の船舶は、此通江子と營口との間を往來するものなり。遼河の最上流港を鐵嶺より此地に換へたるは、星霜未だ淺しと雖も、人口は既に三萬五千に達し、盛京省中の一都會と成れり。實に東三省の貨物にして遼河の水流を利用するものは、先づ此處に吞吐せらるゝなり。滿洲内地の開発に伴ひ、將來多望なる一埠頭なり。

### 十二 昌圖（東遼河の大市街）



昌圖は吉林奉天間の一都會にして、東遼河平野の中央に位置す。人口二萬。南一小丘を超れば開原に達すべし。西は六里にして通江子に行くべし。市街の規模大ならざるも、附近には煙草、麻苧の産出夥し。

六四

### 十三 奉化(邊牆門外の要地)

奉化一に賣買街と呼ぶ。人口六千。邊牆門外繁華の地なり。城廓の周圍には溝河を繞らし西北流して遼河に入る。雜穀、藍、燒酎、煙草、蘇油、木材等の貨物集散す。

## 第八章 鴨綠江流域の都會(滿韓の關係最も大)

### 一 鳳凰城(古來より名高し)

清韓の國境を爲す鴨綠江流域に在る最大都會を鳳凰城となす。此地鴨綠江畔を去る十三里、奉天、營口等より朝鮮に至る要害の地なり、往昔唐の太宗も、朝鮮征討の際、此地に兵を駐め、又近時にありては、日清の役、日露の役、共に我軍が朝鮮より北進するに當て、占領せし所なり。又此地は古來より朝鮮の使節が、清國に入朝するに際し、始めて北京の官吏に禮遇を盡すの所たり。遼陽より安東縣に至る間に於て、都會らしきものは、一の鳳凰城あるのみにて、他は蕭索たる一小寒村に過ぎず。鳳凰城は鳳凰邊門の西方、凡そ二里を隔てたる廣濶なる平野に位置す、城は方形にして周圍約二十町、甃を以て壁とす。南に鳳凰山あり、全山々骨を露出し、怪巖奇石突兀し、峰巒高く雲霄を摩す。山頂また一城塞あり、大軍を屯するに足ると云ふ。今、九連城より北

六五



京國道に向ひ、北進すれば、蛤蟆塘、岔路子、老虎洞、野猪園、湯山、地子を経、長嶺を越ゆれば、即ち湯山城に至る、此行程八里、湯山城より高麗邊門を通過すれば鳳凰城に達すべし。城の内外は人家稠密し、殊に南門外は市街縦横に通じ、賣買盛なり。人口二萬あり。

### 二 九連城(軍事上の要地)

九連城は、盛京省安東縣に屬し、鴨綠江を隔て、朝鮮の義州と相對し、其間僅かに四十餘町に過ぎず。戶數僅に六七十の寒村にして、固より都會の資格なしと雖も、北京公道の要衝に當る故に、其名高し。之より黃海岸に沿ひ、旅順口に至る凡そ百里は、道路平坦なり。古の九連城の古址は、一小丘にして、今は唯其壘壁を存するのみ。

丘下に璽河の流れあり。北に虎山を控へ、南に老龍頭山を擁す。

### 三 大東溝(唯一の材木市場)

大東溝は奉天府安東縣の管轄に屬し、北清一帶に供給する、材木の主要なる賣買市場にして、鴨綠江の河口に在り。其地勢たる對岸韓國に屬する河岸は、岩石より成れども、清國に屬する地方は、一帶に蘆葦茂生する洲を爲し、雁鴨の水鳥類、水上一面に游泳群居し、稀れに丹頂鶴を見る。而て大東溝の市街は、此洲を爲す部分に建設せられ、其市街に接して、幾十の支流縦横に疏通し、以て河海の双方へ、舟筏を通ずるに便せり。

市街は略東西に長く、其延長約我一里、南北に狭く、其中約十數町内外にして、戶數約一千、内大店約二百戸、人口一萬と稱するも、



夏時は山東地方より来る、出稼ぎ者多き爲めに、數萬人に及ぶことあり。數名の日本人は賣藥行商として、夙に此地に住めり。而して官衙は、巡檢衙門及び大東溝木稅局あり。前者は警察事務を執り、後者は材木に課する稅を收納す。

大東溝は材木賣買の爲め、特に設けられたる市場にして、以前は安東縣大孤山等に於て、賣買を爲したれども、近來其賣買高著しく増加せしを以て、特に市場を此地に移せり。蓋し當地を安東縣に比すれば、筏の繋留に便なるのみならず、河水漲溢するも、材木流失の虞なく、餘地充分にして、材木置場の區域甚だ廣く、且つ其輸出に供する、船舶の來往又は大船の碇泊等、種々の便利あるによるを以てなり。

交通は近年、當地と芝罘港との間に、汽船の便開けし以來、大に便

利となれり。兩地間の距離百八十五哩にして、約十八時間にて到達す。但し大東溝は、潮水干満の差甚しく、潮流急にして、且つ遠淺なるを以て、船舶は數哩の沖合に、碇泊せざるを得ざれば、港灣として價值少なきを免かれざれども、遼東各部に在りては、蓋し他に比類なき良港なり。之より上流安東縣へは、支那船にて鴨綠江を往來せり。

大東溝の生命たる、材木賣買の状態に就て述べんに、材木の取引は、必ず賣買双方の仲間に立ちて、其周旋を爲す專業者の手を経る所の間接取引なり。此方法たる獨り當地のみならず、清國一般の市場に通ずる、大取引の原則なりとす。されば大東溝に於ても、材木の賣買兩者は、取引の周旋を行棧(仲立業兼問屋業)を營む商店なりに依頼するに依り、行棧は其仲間に立て、賣買を調成するなり。



行棧は賣買双方の周旋に附帯する業務として、木税納付の手續、材木運搬の取扱、材木商派遣員の宿泊處を營む。而して行棧に宿する者は、每室一客の占有に歸し、食料は自辨なるも、室代は無料なり。又行棧は筏業者に對し、其材木を自店に持ち來る豫約を以て、材木代價の八割以内を、無利子にて前貸することあり。而して行棧の手を経て、賣買したるものは、爾後材木を運搬し終る前に於て、生ずる取引上の紛議は、總て行棧の責任となり、賣買双方に迷惑を掛ける慣習なる故に、双方とも安心して賣買を行ふことを得るなり。取引の盛んなる時期は、清曆六七八の三ヶ月にして、十月より翌二月一杯は結氷の爲め休業す。其閉止期の割合に早きは、八月中旬以後は、北風強く船舶航行の危険ある故なり。取引は現金賣買を普通とす。之れ當地の取引たる北清各地より來り、之れが買収を了れば、

七〇

歸郷する顧客多き故なると、又一には、賣却者の大部分は、薄資にして、勞働社會に近き、筏乗りの類なれば、自然收金を取急ぐ事情あるに由る。行棧の周旋料は賣買價格百圓に付二圓の割合にして、賣買者双方より、其半額づゝを支拂ふものとす。材木取扱商店の主なるものは、長豐棧、玉合升、吉順棧、中和德、萬順棧、合盛棧、全順棧、永成棧、義德棧、泰順棧、同慶棧等なり。商店の資本は、信用を主として營業するが故に、案外少額にても足れり、即ち一二千圓の少額にても、立派に營業し得ると云ふ。

#### 四 安東縣(鴨綠江畔の牛莊)

安東縣は通稱を砂河鎮と云ひ、又鎮江と稱す。往時鎮江堡を置き朝



鮮の防禦に備へたる所にして、光緒二年に之を縣と爲し該衙門の所在地とせり。盛京省奉天府の管轄に屬し、韓國義州へは僅に一里餘に過ぎず。其市街は清韓兩國の分界を爲す所の鴨綠江の江口を遡ること約五里の上流沿岸に在り。前面は鴨綠江を隔て、韓國に對し、後は一帯の崗陵を負ひ、其巾狭くして且つ長し。即ち江岸に沿ひたる延長約我二十餘町、其巾十餘町にして商家五百餘戸あり。人口は二萬と稱すれど、其大部分は勞働者にして、夏時商業繁盛の際に至れば、山東、山西等の支那本部より出稼ぎに来るもの頗る多く、其數少なき年にては七八萬人、多き時は十萬人に上ることあり。然れども冬季結氷の頃に至れば、大抵離散して郷里に歸り、店舗を有する者も十の七八は、歸郷するを常とする故に、此期間は、市況甚だ寂莫を極む。昨三十六年十二月末日の調査に依れば、日本人にして

此地に在る者二十餘人に及び、雜貨、賣藥の類を鬻げり。又日露戰爭前に在りては、露國は此地に數百の守備兵を置き、知縣の如きも露國官吏の制肘を受け、動もすれば之が鼻息を窺ひ事を處するの風ありたり。

商業は鴨綠江沿岸の咽喉に位し、百貨集散上の樞要市場なるを以つて、遼東東部の内に在りて、他に見ざる繁昌をなし、位置状態兩ながら、牛莊に彷彿たるの觀あり。只其規模の彼は大にして是は小なるのみ。蓋し牛莊は遼河口に在りて、滿洲内部に吞吐する貨物の大集散地に屬するも、是は鴨綠江に在りて、其東部たる鴨綠江一帯の集散市場を爲し、且つ牛莊は大船巨舶を容るるも、本市は支那船の通行に止まるのみ。支那船に依れば尙ほ上流數十里の間に舟楫を通じ得べく、又近來に至り大東溝まで小汽船の通ずるものあるに至り



しより、大に便利を來たしたるのみならず、我大阪商船會社は更に一段の奮發を爲して、内地と當地との間に、直行航路を開始せしかば、將來一層の繁華を來たし、恰かも本邦と牛莊との關係頗る密接なるに至りし如く、亦本邦と當地の關係、逐年密接の度を増すや疑ひなき所なり。

安東縣を経て集散する貨物は、從來芝罘を通過するものにして、即ち此地より輸出する貨物は、先づ芝罘に至り、此地にて消費する必要品は、總て芝罘より輸入せらるゝ状態なるを以て、商權は出入共に芝罘清商の手に屬し、安東縣は恰かも芝罘の出張所の觀ありたり。然れども我内地と此地との直通航路の開始は、從來の形勢を一變するに至るべし。而して其販路の區域は、西は岫巖、北は鳳凰城を包括し、寬甸、懷仁、通化の諸縣も其勢力範圍たり。又對岸の韓國方

面は、義州より平安道の大半に及べり。輸出貨物は材木、豆類、其他の穀物を主とし、作蠶糸、絹紬の名産あり。輸入貨物は綿布、綿絲其他の雜貨類にして、本邦製の燐寸、紙捲煙草の如きは輸入以來倍々好況を呈せり。又相場會所ありて毎朝銀及び穀物の相場を建て其日の取引相場とす。商賈の主なるものは穀物商、豆油製造所、呉服商、雜貨商、兩替店等にして、孰れも宏莊なる店舖を構へ、取引も亦盛大なり。

安東縣が短年月間に長足の發達を爲し、夏季に至れば十萬の人口を擁し、市況繁盛なる大都會たるに至りしは、全く其上流より輸送し來たる材木に待つや大なり。尤も近年に至り材木市場を大東溝に移したるを以て、大ひに取引の數を減じ、昔日の如く盛ならずと雖も尙ほ舊來の慣習上此地に於て取引を爲す者鮮なからず。材木の賣主



は筏と爲して、鴨綠江を流下し來るものにして、殊に雜字號の筏と稱し、流水を拾集して作りたるものを多しとす、買主は北清地方又は此地附近のものにして、其買收者は固より之を貯藏し、商機を見て徐々に賣出すが如き目的にあらず、利益あれば直に轉賣する者多し。其取引には北清遠來の客は、大東溝の行棧と同じく、所謂船棧の手を經れども、當地のものは必ずしも船棧に依るに非らず。殊に雜字號の筏を賣買するに際して然りとす。

雜貨、穀物、材木其他一般貨物に對する支拂ひは、總て現金にして買入の翌日支拂ふを例とす。但し芝罘より來たる貨物に對しては、十日乃至八日の猶豫あるものとす。數年前までは銀票即ち手形取引の慣例ありしが、現今各國の國際關係甚だ泰平ならざるを以て、手形を出すも、人々不安の念に驅られて、傾收を肯ぜず。若し又貨物

を賣却するに問屋の手を經るときは、百圓に對し三四を手數料として引去るを以て、賣主は問屋に對し三分の口錢を支拂ふ理となるなり。

安東縣に於ける商業の繁盛なる時期は、清曆三月より九月まで即ち解氷後より結氷前までの間なり。十月より二月までは、商人も勞働者も大抵歸郷するを以て、商況從ふて閑散なり。又此地に税關本局あり。各地に分局を配置し其出入貨物に課税す。

當地に於ける錢舖、即ち支那銀行は専ら芝罘と取引せり。當地と芝罘と取組む爲替は無手數料なり。其爲替金の受取期日は通例十日目なり。但し現金を護送する場合には、百圓に付き五圓の手數料を徴收す。通貨は銀塊、洋銀、銅錢の三種にして、銀塊は所謂馬蹄銀なり。馬蹄銀は新物、材木等總ての大取引に用ゆ、其芝罘より來るも



のは良質なれども、天津より来るものは悪質として受授を好まず。洋銀は中國銀、墨銀、日銀の三種ありて、通用すれども墨銀は之を嫌ふ風あり。其最も好むは我銀貨にして二割高にて流通す。蓋し日銀は其質の善良なるのみならず、日清戦役及び日露戦争の爲め、地方住民は本邦を敬慕するの念慮より然るものとす。銅錢は小錢と云ふ、其品質粗悪にして又其形状頗る小く、中指頭大に過ぎずして。他地方には未だ曾て見ざる劣等のものたり。

## 五 其他の都市(懷仁、通化、興京、新兵堡、寬甸)

鴨綠江流域の都市には、鳳凰城、大東溝、安東縣の外尙ほ懷仁、通化、興京、新兵堡、寬甸等あれども、其繁盛の度は、到底前記の三市と日と同ふして語るべからず。

懷仁城は光緒の初年新設したるものにして、周圍二十四町、城内は官衙、兵舎の外住民なし。市街は城外に在り人口約五千。鳳凰城の東北凡そ五十里、鴨綠江の北十里の所、佟佳河の東岸に在り。奉天府より朝鮮の北境、楚山に至る要區なり。通化は懷仁と同時に設けられたる市街にして、人口四千。近傍に鑛山あり。北は海龍城、輝發城を経て吉林府に通じ、西は汪清門、新兵堡より興京に達し、西南は懷仁に到り、東方は小徑を辿つて鴨綠江岸に通ず。物産は高粱、豆類、材木あり。城は四角形に築かれ、周圍十六町あり。貨物の運搬は冬季結氷の時を待て之を行ふ。興京は清國太祖興隆の地として、歴史的事蹟あるのみにて、人口僅に二千に過ぎず、寂寥たる一小市にして、商業上價值少なし。城西二十八町なる永陵の地は、太祖の陵なり人口四千を有す。永陵より



更に西する五六町、興隆街あり。是亦人口二千を有す。奉天に至る大道あり、此道程三十七里。新兵堡は渾河の上流にある市街にして、山中の大市場なり。東は通化に至り、南は懷仁に通じ、東北は朝陽鎮を経て吉林府に達す。人口六千。木材の産出夥しく、渾河を下り奉天に送る。寛甸は人口五千あり、滿洲内地より朝鮮に至る一要區なり。縣城は光緒初年の建築にかゝり、概と粘土を以て壁を造る、周圍一里餘、城内の三分一は、人家稠密の市街を爲す。地形は北方五町餘にして山峯聳立し、岩石巍々として攀登すべからず、南は一里餘にして小丘連亘し、東は十八町にして大山脈あり、此處に小徑あり、太平哨に通ず、滿洲邊疆の一鎮なり。

### 第九章 松花江流域の都會(滿洲の母)

#### 一 三 姓(松花江下流の要市)

松花江は滿洲の母と謂ふべく、松花江あるが故に、滿洲の富源無盡藏なりと歌はるゝ程なるを以て、其流域には繁華なる都會多きは、自然の理ならん。先づ松花江口より遡て第一にある大市を三姓とす。三姓は松花江と其支流たる、牡丹江と會流する東南岸に位置す。人口約二萬、東方は近く山脈連亘し、北は松花江を挟んで拉哈富山に對し、西南は平野茫茫として際涯なく、又耕地肥沃なるを以て、禾穀の收穫多く、江上には黒龍江と、市の上流なる哈爾濱を往復する船舶織るが如く、真に滿洲の倉庫と稱せらるべき地方に在る都會たるに耻ず。



三姓城は周圍三十餘町、壁土の高さ十三尺、市街は東西に長く、南北に短し。道路は甚だ狹隘にして、其廣さも六尺を超へず。家屋は石造のもの多く、東西の二街に牌樓あり、此邊最も繁華熱鬧の巷にして、大なる商店を始め旅房、酒樓皆此處に密集す。又門外に出れば、菜圃の中、僅に土壘の殘存するを見る、是即ち三姓の古城趾なり。本市は黒龍江より哈爾濱に至る中間、唯一の大都會なるを以て、將來哈爾濱の發達は、自然本市の發達をも併せ促すや疑ひなき所なり。

三姓と寧古塔の交通は、牡丹江の水運あり、西瓜、蒜、米、海菜、海參等を寧古塔より送り來り、穀類、燒酎等を寧古塔に送り、此兩市の關係は甚だ密接なり。又東の方三十五里なる太平溝及び北三里なる樺皮溝は、共に沙金の産地として知らる。

## 二 寧古塔（吉林省第二の大市場）

寧古塔は、三姓に於て松花江と合流する牡丹江の上流にある、大市街なり。東南は長白の大山脈巍々として聳へ、牡丹江は西より來り、寧古塔城の東南を迂流し、皆天然の防備を爲す。城は磚石を以て築き、周圍十五丁、外牆二里に亘り、西北は廣豁にして平野を控へ、副都統あつて此處に駐劄す。南六里餘にして、東清鐵道の海林驛に通ずれど、道路險惡の爲め利便を與ふる鮮し。

人口は約三萬あれども、多くは旅人にして、商賈は其三四割を占むるのみ。商店の大なるもの皆城外に在り。産物は高粱、小麥、煙草、阿片を重なるものとし、魚族には鯉、細鱗魚、鮭等あり、就中鮭魚最も豐漁なり。又皮革製造所、製粉所、豆粕製造所、素麵製造所數



多あり。製品は牡丹江により三姓に送る外、琿春を経て浦鹽斯德に輸出するもの少なからず、外來の商品は、重に吉林府若くは支那本部の製品を使用するに止まり、未だ日英米等の製品を購求するに至らず、只僅に露國製の廉價なる木綿、更紗、羅紗の類、多少販賣せらるゝのみ。

寧古塔は吉林府に亞て、四通八達の要區に當る。東は三岔口より露領ニコリスク市及び興凱湖一帯に通じ、南は松岑子、琿春を経て、露領ボセツト灣、朝鮮の慶源府に行くべく、北は牡丹江に沿ひ三姓に達し、又西は吉林府に通ず。吉林省中、吉林府を除いては、寧古塔は最も重要な地點を占む。而して此地より、三姓に至る牡丹江沿岸の重なる市邑は、掖河、頭站、八榆樹、太平店等なり。

### 三 賓州 (三姓、哈爾濱間の要市)

賓州は三姓より哈爾濱に至る、松花江右岸の一市なり。人口約一萬五千。商業も稍盛んにして、本邦製の繡寸、洋傘、玻璃器、露國製の更紗、鐵器等を鬻ぐ者少なからず。

### 四 哈爾濱 (産業的理想の大都市)

哈爾濱は露國が東洋の新莫須科府たらしめん爲め建設せる所に係り、世界に於ける都市經營の最も宏大なるものなり。露國は浦潮斯德、旅順口の二港は、太平洋に於ける軍事上の威力を示さん爲め、經營したれども、此處は平和的産業的理想の都市を實現せしめんと、力を盡したる所にして、露國民自ら呼ぶに、亞細亞に於ける莫須科な



る稱號を以てせり。

哈爾濱は松花江の上流、南の方、阿勒楚喀を距る九里、北の方呼蘭を去る八里の地點に在り、浦潮斯德より九十里、旅順口より百二十餘里を距てり。地勢は南方、小白山を雲烟の間に望み、東西は茫茫限りなき大平野を控へ、東は黒龍江省第一の沃土たる呼蘭、白彦蘇々と相對し、周圍數百里は、眞は吉林省の豊地を以て固まる。高粱、大麥、小麥、豆、苧麻、煙草、其他果物等の農作物は無盡に生育し、且つ礦物、木材に富み、牧場に好適なる地方亦其附近に在り。鐵道は後貝加爾州より浦潮斯德に至るもの茲處を横斷し、更に其支線は本市を起點として、旅順、青泥窪に分岐し、地形上滿洲の中心を占む。

元來此地は、始め鐵道技師が其本據地として設定せる所にして、從

來は阿勒楚喀より呼蘭に通ずる一小村落なり。此舊村落たる哈爾濱は、支那人の所謂上房と稱する地にして、現今の哈爾濱市は、此上房より二里餘の所に建設せられたるなり。哈爾濱市は新市街、松花江沿岸區、舊市街の三大部に區劃さる。新市街は東清鐵道の交叉點に當り、露清銀行、鐵道守備隊本部、郵便電信局、裁判所、鐵道工場、鐵道會社附屬病院、寺院、學校、警察署、俱樂部等の官衙、公共機關あり。加之本街は一切外國人の居住を許さず、露國人のみ在住す。舊市街は、初め一大都會たらしめんと計畫せし所にして、鐵道事務局、露清銀行支店、警察署、寺院、劇場等あり。松花江沿岸街は、東清鐵道會社汽船部を始め、公私の銀行會社あり、日露清人を始め各國人雜居し、日露戰爭前は日本人の居住する者八百人に上り、三街中最も繁華の地たり。又バザルと稱する大市場ありて、日



常の消費品を販賣す。即ち舊市街より西北二十餘町、丘陵の上にあるを新市街と爲し、之より西の方、十八町餘の所にある松花江沿岸一帯の地を埠頭區と爲せしなり。

哈爾濱は滿洲の中原に在りと雖も、恰かも露國の中央にあるが如く全く露西亞的なり。此地に於て土地を所有し、家屋を建築し、又は永久的の企業に従事する者は、露國人及び支那人の外は一切之を許さず。哈爾濱の周圍何哩と云ふ廣大なる地域には、外國勢力の進入を拒絶し、且つ外國人に對しては如何なる權利をも認めず、唯だ外國人の居住せるは、單に之を默許せるに過ぎざるなり。

人口は明治三十四年には一萬二千人に増加し、翌年は二萬となり、昨年は軍人を除き六萬人に激増し、日本人の外、獨、澳、希、土等の諸國人亦三百人あり。他は皆露國人にして米國人は一人も居らず、

此中支那人は四萬人ありたりと。

輸入品の重なるは、石炭、セメント、鐵、枕木、麥粉、砂糖、茶、酒類、食料品、羅紗、陶磁器、織物、雜貨等にして、本邦製の陶磁器、羅紗、フランネル、シャツ、毛布、日用雜貨も少なからず。其輸入方面は、最初浦潮斯德より來るもの多かりしも、同港稅關手續の改正せられたる結果、初て遠距離なる旅順より來るもの増加せり。製造工業の重なるものは、製粉業にして、一日の製造高百萬封度に上り、歐羅巴式新機械を使用する工場十數箇所あり。次は煉瓦製造場にして、近隣を合せ二百箇所あり、製品は悉く市の建築に充用せられ、次は露國人の唯一飲料たる火酒製造所、麥酒製造所、肉類製造所、豆油製造所等なり。

哈爾濱より黒龍江までは、大小の河航汽船日に幾層となく往來し、



旅客及び貨物の運搬に當る。各船は常に旅客貨物滿載の有様にて、其盛況殆んど想像外なり。

滿洲鐵道建設の任に當れる、技師長の談に依れば、露國は滿洲鐵道のみにて、二億八千萬圓を投じたる由なれば、之に旅順、青泥窪、哈爾濱等の建設費を加ふれば、露國の滿洲に於ける放資額は、少なくも五六億圓に達すべし。

### 五 白彥蘇々（醸造業の中心）

白蘇彥々は松花江の北岸平坦の地にあり、東清鐵道を距る約二里半。南、哈爾濱を去ること九里餘。城廓は頽敗したる土壘を以て繞らし、市街は東西に長く、南北に短し。繁華なるは東西の市區にして、人口約一萬、松花江畔には埠頭を設け、貨物積卸の便に供す。冬季結

氷の時は、陸上の運搬盛大にして、營口に搬出する貨物は、毎歲八十萬貫を下らずと云ふ。

本市は醸造業の中心にして、廣大なる酒造所數十個所あり、一年數千萬斤を造る、之に次て油製造所ありて、一年二百萬斤乃至三百萬斤を産出す。又白麵、小糜子の産地として知られ豚の飼養も盛んなり、産品は松花江の水運に據り、露領沿海州の各市、浦潮斯德及び下流なる三姓に輸出す。此市亦、哈爾濱の發達に伴ひ、隆昌を來たすなるべし。

### 六 呼蘭（農耕業の中心）

呼蘭は松花江の支流呼蘭河の左岸、南、哈爾濱を去る八里の地點に在り。城壁を設けず、人口五萬、市は南北に長く、東西に短かし。



松花江と呼蘭河の合流點に至るは、一里半あり。又東清鐵道を距る約六里なり。

呼蘭市街の近傍は地味肥沃、禾穀の産額饒多なるを以て、多数の官設倉庫ありて、米麥を藏置し、黒爾根、愛理等の兵營に送る糧食とす、穀物に次ぐは、陶器、錫製品、毛皮、織物等にして、又大なる薬店あり。市街の内外には、四五十の豆粕製造所あり、其呼蘭廳管内を合す時は二百個所に及び、一歳の産額豆油七百萬斤、豆粕六百萬斤を出す。燒酎製造所は管内に三十六個所あり、一年千七百萬斤を造る。燒酎は黒龍江省全般に供給し、其他の産物にして水路、露領に輸出するもの頗る多し。輸入の重なるは、伯都訥より來る食鹽、三姓、拉林等より轉送せらるる長白山の木材等なり。

七 伯都訥(松花江、嫩江の連結地)

伯都訥は吉林省中、内蒙古に近接せる大市街にして、松花江の右岸に位置し、同江の流沙より形成す。四方茫漠たる平野なり。城壁は土を以て圍み、四方各一門あり、中央に在る牌樓より南門に至る間を、最も繁華の巷とし、大賈巨商の店頭聯列す、人口は約四萬二千あり。

製造業盛大なり紙、敷物、毛氈、索繩、金屬品、革皮、豆粕、麥粉、燒酎の各製造所は、市の内外到る所にあり、豆粕は吉林、營口に、豆粕は齊々哈爾に出し、米麥は松花江、嫩江によつて北方に送り、黒龍江省には燒酎を供給す、牛莊に輸送する貨物のみにて、一年二百萬貫に達すと云ふ。交通は甚だ便利にして江上の舟楫織るが如し。



## 八 吉林 (滿洲の中央市場)

吉林は吉林省の首府にして、滿洲の中央に位置す。市街は松花江の沿岸に在り、南は江流に瀕し、西北一帯は近く山脈を繞らし、東北の一隅は松花江流域の平原を望む。遠近の諸峯は赫山多く、玄天嶺最も高く。滿洲北方の咽喉を占め、黒龍江、盛京兩省を聯絡する要地なり。吉林城は橢圓形に造られ、周圍約二里、城壁の外は磚を用ひ、内部は土を用ゆ、高さ七尺、四面に門あり、東來、朝陽、巴爾虎、北極、致和、德勝、福綏、迎恩と名く。市街は規模甚だ大なり、其一區の如きは、敷くに方木を以てし、幅八間の大道にして、雨後も泥濘を感ずることなし。家屋は概ね磚を以て築造し、人口約二十萬を有す。官衙、商店は概ね城内に在り、

銀銅銀鐵の匠舗、牛羊豚の肉舗、穀物舗、油製造舗、藥舗、煙草舗の大なるもの頗る多く、輸入商品の重なるは、洋傘、洋燈、卷煙草、玻璃器、燐寸、昆布等の本邦製品を始め、外國品も亦多く、大抵の商店之を需がざるものなし。其富度遙かに奉天の上在り。松花江の水運により、古來より貨物輻湊し、船檣林立せる盛況なるを以て、吉林又一に船廠の名あり。北松花江を上れば伯都訥、齊々哈爾、黒爾根に至るべく、又伯都訥より哈爾賓、呼蘭、三姓に至るべし。東、老爺嶺、長官材嶺の險を超ゆれば寧古塔、琿春より直に朝鮮國境に達し。西南は奉天を経て旅順若くは山海關に通じ、眞に四通八達の要區なり。

## 九 阿勒楚喀 (金朝の舊府)



阿勒楚喀は松花江の南十一里、阿勒楚喀河の沿岸にあり、東清鐵道の便あり。吉林府に亞ぐ繁華の地にして、人口六萬あり。城南二十四丁に古城趾あり、周圍十八町、土壁尙ほ殘存す、高さ一丈五尺、中は菜圃に供せらる、是れ金の盛時、金龍殿、待客殿の遺蹟なりと傳ふ。

水陸二道あり三姓に達す、北は呼蘭より齊々哈爾、黑爾根、愛琿に至り、哈爾濱には九里を距てり、西南は吉林府に通ず。近傍の耕地豐沃にして五穀能く穰り、阿片は殊に其名高し。

### 十 長 春 (邊境門外最盛の貨物集散地)

長春又一に寬城子と稱す。伊通邊門外にある一大市場なり。人口十萬。土地廣濶にして、且つ肥沃なるを以て農産物に富む。長春は地

勢低卑なる伊通河邊に在るを以て、東清鐵道は之を避け、西方一里なる十里舖に停車場を設置せり。

吉林、黑龍江兩省の物産は、此處に聚積して諸方に頒配せられ、其營口に至るものにして、長春府在住商人の手を経ざるものなき程なるを以て、是等の地方に干係ある商人は、大抵出張所若くは代理店を置く。其繁盛なること、故府吉林を凌ぐ。集散貨物の重なるは、高粱、大豆、豆油、燒酎、阿片、木綿、織物、蘇油、木材、藍、人蔘、毛皮等にして、皆營口に輸送す。輸入品は紡績糸、綿布、石油、紙、砂糖、陶磁器、燐寸、毛布、卷煙草、其他の雜貨を重なるものとす。

長春が吉林府を凌ぐ繁盛を來たしたるは、地勢の賜物にして、滿洲商業上の中央に位し、南は伊通州より開原、奉天に通じ、東は吉林



に達し、東北は阿勒楚喀、呼蘭、哈爾濱に行くべく、西北は懷徳、奉化より北京に達する大道に接するが故なり、人呼んで長春は満洲の金庫なりと云ふ偶然にあらず。

### 十一 其他の都市(農安、懷徳)

松花江の支流たる伊通河流域の都市に、長春を除き尚ほ農安、懷徳等あり。農安は伊通河の左岸、平野の中央にあり、人口一萬五千、商業相應に繁榮なり。懷徳は又一に八家鎮と稱し、長春を去る東十八里に在り。人口一萬三千。縣域は光緒初年、奉化と同時に置きたるものなり。

## 第十章 嫩江流域の都會(北滿洲の富源)

### 一 齊々哈爾(黑龍江省の首府)

嫩江は松花江に注ぐ大河にして、其流域に在る大市を齊々哈爾又の名ト魁とす。東清鐵道のホウルホウラ驛を北に距る六里餘。沙原中に位置するを以て四方平坦なり。黑龍江省の西北に於ける行政商業上の中心にして、黑龍江將軍此處に駐劄す。人口八萬、商人は山西人多し。市は東西に短く、南北に長く、繁華なるは南門外の街衢にして、諸官衙、旗人の居は城内にあり。住民は甚だ雜種にして滿漢人、蒙古人、達瑚爾人、鄂魯春人、索倫人等あり。商賈の大なるは、茶、織物、質、穀物、雜貨、銀行等を營むものにして、取引活潑なり。特産物は煙管具、馬鞍、獸皮、乾酪等にして



米、粟、豆、高粱は伯都訥より水路により此地に輸し、蒙古の馬は此地を経て、東三省に頒配す。

毎年九月十月には歲市を開催す、此時は百貨輻湊し取引頗る廣大にして、牛莊よりは日本始め各國の製品を送り、呼蘭、白彥蘇々よりは米麥、豆油、燒酎を送り、海拉爾よりは、牛羊等の家畜を輸し來て、東三省に頒配し、又北方に遊牧する異種民族は、毛皮其他の獵品を携へ來て、織物農産品と交易して去り、其取引高は數百萬圓に上る。而して此地より吉林、盛京等の南方に送る貨物は、約百萬貫目に上り、又露領より沙金を輸入す。加之南方各地より露領ブラコエチエンスク府近傍に送る貨物は、此地を經過し、愛琿に至るものなるを以て、冬季結氷の候には、車馬絡繹として絶へず、黒龍江省中唯一の都會なり。

## 二 墨爾根（嫩江航路の終點）

墨爾根は齊々哈爾、愛琿の中區にある要地にして、人口一萬、松花江より嫩江に遡る船舶の終航點とす。

墨爾根城は康熙年間の建築に係り、北西嫩江を繞し、東南山丘を帯び、西海拉爾に通ずる街路あり、市街は南北に長く、東西に短し。冬季結氷の候には、滿露陸上貿易の貨物集散多くして、其繁華は齊々哈爾に亞ぐ。

## 第十一章 黒龍江流域の都會（滿露の重要關係地）

### 一 愛琿（對露貿易の大市場）

滿露國境を形成する黒龍江流域にある、重要なる都會を愛琿とす。



又黒龍江城と稱す。江の右岸にあり、西北一帯の曠野を隔て、伊勒呼里阿隣の山脈を繞し、東北江水を帶ぶ。露領ブラゴエチエンスク府の南方七里餘の所にあり人口一萬。商人は山西、山東人最も多く何れも滿洲物産を露領に輸出するを生業とす。又露領より砂金を買収する額も少なからず。

城は木柵を建て、四面各一門を置き、各面の長さ一町四十間、一切の官衙此内に在り。本市街は清露陸上貿易の要地にして、夙に繁華を以て知られたるが、夫の千九百年の兵亂に依り大損害を蒙れり。千八百九十九年、此地より、ブラゴエチエンスク府に輸出したる貨物は、百七十萬圓にして、其内家畜百三十餘萬圓、穀物十八萬圓なり。

### 二 薩哈連烏拉(愛琿の出張所)

薩哈連烏拉は愛琿を去る事北に十里、ブラゴエチエンスク府の對岸にあるを以て、又清露貿易の一市場たり。人口三千。穀物、油、家畜等を對岸に送出す。恰かも愛琿の出張所の如し。

### 三 海拉爾(黒龍江省第二の商業地)

海拉爾とは俗稱にして、本名は呼倫貝爾と云ふ。黒龍江の上流、海拉爾河の廣漠たる溪谷中にあり、市の西北二十餘町には東清鐵道の停車場あり、黒龍江省の西北に於て、齊々哈爾に亞ぐ要區にして人口一萬。露國は此地より分岐し、一は愛琿に至り、ブラゴエチエンスク市と連絡し、一は東蒙古を横斷し、萬里の長城を超へ、張家口



に至る鐵道敷設を計畫せり。又此市と停車場の間に、露人の建設せる一小市あり、將來の海拉爾たらしめんとする所なり。

商業は總て齊々哈爾商人の掌中にありて、滿洲及び支那本部の産品を蒙古に輸出し、蒙古の物産を南方各地及び露領に致し、別に從來よりの商賈あるなし。

海拉爾の西方三十餘里の地にガンヂユールと稱する村落あり。毎年八九月を期し十日間歲市を開く。市場に取引せらるゝ物品は、穀物、織物、金屬製品、皮革製品、家畜、獸毛、茶等にして、其關係地方は、滿洲蒙古は勿論、遠く支那本部、後貝加爾州に及び、取引高頗る廣大なり。

## 第十二章 圖們江流域の都會(滿韓露の要地)

### 一 琿春(滿洲東北方の咽喉)

清韓露の國境を爲す圖們江流域に於て、最も重要なる市街を琿春とす。琿春は圖們江の支流、琿春河の沿岸にありて、人口二萬を有す。滿洲の東北方より、露領ボシエツト及び浦潮斯德、朝鮮咸鏡北道の慶興、穩城等に至る要害の地とす。此地を距る東南十里、三四道溝には砂金を産し、數百の労働者之が採取に従ふ。

輸出品は牛豚等の家畜を始め、麥、豆等にして、輸入品は織物、雜貨、煙草等なり。本邦製品にして、浦潮斯德より轉輸せらるゝもの頗る多く、玻璃器、織物、洋傘、洋燈、陶磁器、石鹼、卷煙草は其重なる商品なり。千八百九十九年、露國へ輸出したる額は百二十萬圓、輸入は二百五十萬圓に上り、露清の陸上貿易上、重要なるは愛



理と、兄たり難く弟たり難き干係あり。

### 第十三章 滿洲の重要關係地(宛然滿洲の出張所)

滿洲の貿易上重要密接の干係ある地にして、滿洲以外にあるもの三あり。一は芝罘、二は天津、三は秦皇島是なり。滿洲の貨物を吞吐するものは、皆に營口一港に止まらずして、亦此三地より出入し、營口と相俟て、滿洲各市場の豐潤を計る。

#### 一 芝罘(遼東の貨物供給地)

芝罘は清人之を烟臺と稱せり、天津條約の結果、千八百六十三年開港せられたり。蓋し烟臺は煙火を擧ぐる高臺を設備したる所にして此地固有の名稱なり、芝罘は其前面海中に在る島嶼の名なりしを、

外國人誤て命名し、遂に其名を襲用するに至りしなり。此地山東省登州府福山縣に屬し、渤海灣頭に位し、南北兩清航行の汽船は大抵此港に寄港し、商業繁盛、人口六萬あり。

昔時は一漁村なりしに近々數十年に於て今日の如き繁榮を見るに至りたるなり。元來山東省の内部は山岳多く、道路險惡、交通の便を缺き、人民亦貧窶にして購買力に乏しく、且つ近傍には天津の一大市場ありて、貨物の販路を控制し貿易上深く望を屬するに足らざるが如しと雖も、其外國輸入品の如き、之を滿洲の曠漠たる沃野を控へて、其出入口たる營口に比すれば却て優るの奇觀を呈するは何ぞや。他なし。鴨綠江岸清韓兩國地方に好個の顧客を有し、貨物の販路を存するに由るものにして、彼の大東溝、安東縣に輸入する貨物は、重に此地より供給するに由る。殊に近年當港と大東溝間に、汽



船の航行を開始せし以來、鴨綠江方面の交通に一生面を開き、一層の利を見るに至れり。一昨三十五年税關の年表には、貨物三十餘萬圓、貨幣五十餘萬圓の輸出ありしが、右は正當の手續に依りしものにて、在留清人の言に依れば、毎歲少なくとも二三百萬圓の貨物を鴨綠江流域に送ると云ふ。即ち安東、大東溝、大孤山の諸港は、芝罘あるが爲め、貨物集散の頻繁を來たすものにして、芝罘は是等鴨綠江流域にある各都會の出張所たるの感あり。當港に毎年寄航する船舶は三千隻乃至四千隻に及ぶ。

## 二 天津（北清第一の貨物集散市場）

天津は北清隨一の貨物集散市場にして、白河口を遡る二十餘里の沿岸にあり、人口七十萬と稱す。輸入品は絹布、綿糸、砂糖、染料、

石油、燐寸、鐵器、枕木等、又輸出品は米穀、絹布、材木等にして、其取引區域は頗る廣く、近くは山東、直隸、山西を始め遠くは滿洲及び蒙古に亘り、更に進んでは、恰克圖街道を通じて西伯利亞に達す。

交通の便頗る能く、遙に南清より來る大運河は、其北部に於て白河と相會流して舟楫を通じ、鐵道は、北進三十餘里にして北京に達し、南行十餘里にして塘沽に到り、尙ほ遠く山海關を経て、牛莊を通過し、東清鐵道の大石橋と連接す。

明治三十五年に於ける輸入は八千十八萬圓、輸出千三百五十六萬圓、合計九千三百七十四萬圓にして、本邦品の輸入せらるゝものは、綿絲百八十萬圓、燐寸七十九萬圓、天竺布四十八萬圓は其最高額たるものなり。



三 秦皇島（將來多望の新大貿易港）

秦皇島は明治三十一年四月、清國政府より自ら進んで、各國との通商港たらしむべきを示し、三十四年十二月開港を實行したる所なり。由來北清の地は、寒威凜烈にして天津、營口の如きは、冬季河岸悉く結氷し、貿易杜絶し、郵便物すら尙ほ且つ満足に接続せしむる能はざる不便あり。茲に於て是非一の不凍港を求め、如上の不便を除却するの必要あるより、本港を開くに至りしなり。

秦皇島は關内鐵道湯河の停車場を去る、二里餘、山海關を去る凡そ三里餘の所に位置し、西南は渤海灣に面し、東北は半島海中に突出し、高さ五六十尺、全丘岩石より成る。而して弓形に渤海の水を拉して、一小灣を形成す。長さ凡そ三里あり。海水碧色、白砂遠く連

り、白鷗汀に群遊し、海水浴場たらしむるにもよし。此邊こそ、將來大船巨船の舷を接し、百貨を吞吐する一大商港たらんとする所なり。

秦皇島の陸に接続する所に小河あり、灣内に注ぐ、之より西南三里餘を隔て湯河の海に入るあり、此兩河の中間を市街に充て、秦皇島は公園地と爲し、其周圍は旅館、住宅を建築する計畫なり。市街は長方形を爲し、海岸には凸字形に十三個の波土塲を築き、船渠を設け、起重機を備へ、貨物の積卸、船舶の繫留に遺憾なからしむ。又東南に十五六町に達する突堤を築き、湯河口より出す約一里の防波堤と相對し、其内方を安全錨地とす。然かし本港は不凍港にして嚴寒二三日間は、結氷を見ることありと雖も、天津、營口に比せば其便不便の度は、日と同ふして語るべからざるなり。湯河口より出

あつた



す突堤と相對する防波堤は、長さ三里の豫定にして、其水深、千潮のときは十七尺なるも、全部竣工の上は二十尺以上と成り、大船の繫留に不便なからしむ。

抑も清國內地の交通は、其貨物運搬に際しては、河川ある所は鐵道に由るよりも、費用廉に且つ便利なるを以て、水運の能き地位にある都會は必らず繁榮を來たすなり。今秦皇島の地勢を見るに、灤州を去る二十里、灤河の邊に位す、灤河は燕山附近に發し、喇嘛廟を経て熱河と合し、長城を貫流し、承德府、永平府、灤州を経て渤海灣に注入す。其上流に到るまで舟楫の便あり。且つ喇嘛廟は內蒙古の都府にして、張家口と共に、有名なる貨物集散地を以て知られ、其地の産物には、羊毛、山羊毛等あり、是等の産物は一たび喇嘛廟に集て張家口に陸送せられ、又は水運を利して灤河を下るものとす。

其他承德府、永平府は直隸省東部の貨物集散地なるを以て、愈秦皇島の貿易機關にして、具備するに至らば、如上の都會に出入する百貨は、必らず灤河を利用し、本港を経由して出入するに至るべきのみならず、不凍港なるの賜物は、結氷中天津貿易の全部、及び營口貿易の一部を奪取すべき故に、將來の繁盛は疑ひなき所なり。又東清鐵道の支線は、愛琿に起り、海拉爾を横ざり、蒙古を貫き、張家口を経て通州に來るべく、通州より東三省に至る鐵道は、是亦遠からず布設さるべきを以て、蒙古の産物は、張家口より通州に運漕し、船便にて天津に下り、茲に陸揚して再び汽船に積み、又舢舨に由り白河を下り太沽に送る等の面倒を省き、張家口より直接秦皇島に來るを得べし。

炭量無盡蔵なりと言はる、開平及び唐山の鐵區は又本島附近に在る



を以て、是等の石炭は永久秦皇島より輸出せらるべく、開平礦務局が五百萬圓の豫定額を千五百萬圓に増加し、本島に棧橋、鐵道等の設備を爲さんとするを見ても、如何に本島の將來に重きを措くかを知らるべし。尙ほ鑛山は此外、錦州より東北十二三里なる小凌河の邊、及び康寧の石炭鑛、鐵鑛等は、品質佳良を以て名あり、亦本島より輸出せらるべきものなり。かくの如く秦皇島は、實に前途多望なる、新開港場なりと云ふべし。

### 第十四章 豊饒なる農作地(收穫の多き無類なり)

耕作の最も開け熾んに行はるゝ地域は、伯都訥より呼蘭城を経て三姓に至る、松花江流域を第一とす。滿洲の穀倉と稱せらるゝは此地

方なり。之に次ぐは遼河の沿岸、平坦なる谷地の開豁せる地方にして、遼東半島更に之に次げり。人民の大部分は耕作を業とし、既に廣大なる地域開墾せられたるも、尙ほ耕作に適し而かも全く開墾外に放棄せらるゝ地域頗る大なり。吉林、伯都訥、齊々哈爾、墨爾根、寧古塔、琿春の如き大市場を控ゆる、松花江、嫩江等の本支流沿岸に於る、地味豊沃、牧草青々たる地方にして、未だ牧畜だも行はれ居らざるを見る。斯の如き膏腴の地が、今日まで放擲せられ、農耕發達の度、南方に比し北部の甚だ振はざるは、蓋し人口稀薄、勞力缺乏に基因するなり。滿洲人が農業を尊重するは、支那本部と同一にして、春季始めて耕田に鋤入れを爲すに方り、一定の祭事を行ひ、當年の豊穰を祈る。耕田の方法及び農具は、我内地に見る所と殆んど同一なり。其收穫



の多量なるは實に驚くべき程にて、種子に對する比例は、粟は百倍乃至五百倍、豆類は二十倍乃至六十倍、小麥は十五倍乃至四十倍に上り、一農夫にして二三町を耕作し、優に家族十數名を養ふと云ふ。又耕作は肥料を施して、其收穫高の豊富を計るのみならず、耕地を數區に分ち、毎年禾穀蔬菜の種類を交換播種する、所謂耕地輪換の方法も能く行はる。滿洲農業の發達は、康熙乾隆の交より、政府が本部の住民を獎勵して、移殖せしめ、遂に今日の盛況を見るに至りたるなり。今首要農産物の概況を擧ぐれば左の如し。

○米は 遼河の水域に産するものを第一とし、其色微青を帯び、味亦美なり。之を遼陽青と呼ぶ。住民の常食は、粟、黍、蜀黍、大麥、小麥、蕎麥等なれども、米も亦其主要なるものなり。

○粟は小米と云ひ、晚く種子を播き早く成熟するを以て、滿洲

の氣候に好適せり。

○黍は大黃米と云ひ滿洲到る所に耕作す其糞は馬糞となり燃料となり、又之を以て家根を葺く。

○蜀黍は高粱と云ひ、需要最も廣く、食料と爲し又燒酎の原料とす、産地は全土に適す。

○豆類 大豆は到る處産出せざるはなく、豆油を製し又豆素麵を作る。

○麥類 大麥小麥は主として吉林黑龍江の兩省に産し、燕麥も亦北部に産す。春和の候に播種し、六月上旬に成熟す、南方にては麥類收穫後、尙ほ豆類を植へ九月に至て收穫す。

○棉は 錦州、海城、遼陽、蓋平、開原、鐵嶺等の南滿洲に産出し、品質色澤共に良好なり。且つ需要多きを以て産額逐年増加す、



四月下旬に播種し十月に之を摘む。

○罌粟 是近年阿片の需要多き結果として其栽培を増大せり他の農産物に比し収入頗る多しと云ふ。

○煙草 是到る所に耕作す、清國中最も有名にして聲價あり。吉林省に産するを南山菸と云ひ、吉林府附近なるを廠菸と云ひ、盛京省産を東山菸と云ふ。五月に植付け、十月に收穫す、收穫良好の年にては、豆、高粱を植ゆるに比し、二倍乃至三倍の利益あり、年々の産額は不明なるも、盛京省のみにて平均九百萬斤あり。需要地は山東、直隸を主とすれど、近年は本邦にも少なからぬ輸入あり。

○藍靛 是特産物の一にして、専ら染料に供し、松花江の黠間に産出す。

○苧 是二種あり、一は其實を採りて胡麻油を製造し、他は其纖維を索細に作る。

○人參 是藥草中の最も高價なるものにして、之を栽培する者多し、就中尊重するは野生の人參なり、毎年清明雪解の頃より、數百人群を爲し、深山幽谷に入りて之を採取す、一人能く百圓以上の收得あり。

○蔬菜 何れの地を問はず一般に之を栽培して副食物とす、其種類は韭、葱、蒜、芹、蘿蔔、黃瓜、南瓜、甜瓜、冬瓜、茄子等なり。

以上の外、果實には、松子、榛子、梨、桃、杏、葡萄、棗、無花果あり、又藥品には、金線、茯苓、五味子、細辛、白附子、黃精玉、芍藥、紫耳、百合、木通、澤蘭、地丁、五加皮、甘草、龍膽草、貝



母、牛蒡子、柴胡、半夏、防風、薄荷、麝香、熊膽、虎骨膠、五靈脂、鹿茸、葛根の類多く産出す。

### 第十五章 好望なる商品（我製品の好販路）

滿洲内地は工業未だ發達せず、純然たる農産國にして、原料品を輸出し、製造品を輸入し、生計の程度も亦低きを以て、精巧緻密の工業品よりも、寧ろ普通の品物に甘んずる風あり。日用必需品にして尙も奢侈に傾くものは、販路極めて狭少なり。然れども滿洲が我國の商品を賣込むに、最も適應せる地方なるは、同地を視察せる官民の均しく認むる所なり。

現今の商業は、常に萎靡不振を極め、資本、貨物の運轉共に敏活ならざるは、交通の機關單に天然の道路及び水運に一任し、其發達整備を計らざるに基因す。今や鐵道は漸く内地に敷かれ、交通も亦頻繁たらんとする傾向あれば、將來は貨物の輸出輸入を誘引し、殖産に意を注ぐ者多きを加へ、勞働の需要を増し、生計の程度も上進すべきに依り、我製品を販賣するに當ても、内地の商品市場を擴張すると同時に、又民度の進歩に伴ふ、購買力の増進に逢ふや必然なり。商業の狀態は、各都邑に就て既に述べたる如く、一般に都邑に集中し、其附近の村邑に住む者は、時々都市に就て必要品を購求すること、敢て我國と異ならず。又北部の都會には、毎年日を期して市場を開設し、必需品の交換を爲す、所謂歲市の制度盛んに行はる。例へば三姓にては毎年六七月頃の交に開き、齊々哈爾には毎年數月、海拉爾にては其近傍ガンジュールに毎年八九月の頃を期し十日間、開くが如き是なり。此時は遠近より住民の一時に集合し、其取引も



頗る廣大なり。普通市場に多く販賣せらるゝ物品は、穀類、木綿、燒酎、豆油、毛皮、材木の類にして、鐵製器具等は之に次て好況なり。近來鐵道開通の結果は、直に貨物の輸入を促進したること甚しく、米國の雲齋織、英國の金巾、日本の綿チル、燐寸、露國の木綿織物、鐵製品等を、大概の市邑に見ざるなきに至れり。滿洲内地の産物を、支那本部及び隣境西伯利亞に輸出する額は、毎年驚くべき多額なり。而して其重なる出口は、木材は鴨綠江の上流に於て伐採し、大東溝より直隸山東山西の地方に送り、豆粕は牛莊よりす、又貔子窩、大孤山、牛莊より輸出するは、黄芩、黄蓍、益母草、黄柏、細辛、芍藥、白附子、五味子、熊膽、鹿茸、鹿角、人参等の各藥品を始め、藍靛、線麻、青麻、棉花、烟草、麥粉あり、吉林より北京へ輸送するは、主として家畜なり、其數毎年二三十萬

頭に及び、牛羊、雞卵は琿春を経て浦潮斯徳に送り。狐皮、沙狐皮、猪子皮、羊皮、狗皮、貂皮、狼皮、水獺皮、灰白鼠皮、豹皮、虎皮等は支那本部に送られ。石炭泥炭は遼陽、岫巖、金州等より、便宜の船舶により各地へ輸送せらる。齊々哈爾は家畜の一大市場にして、遠近より一度此處に聚集し、内地に頒配するものは吉林奉天に送られ、露領に出すものは、墨爾根、愛琿を経て往く。滿洲市場の最も盛んなるは、奉天、錦州、昌圖、長春、吉林、伯都訥、寧古塔、阿勒楚喀、齊々哈爾、呼蘭等にして、鳳凰城、安東縣は朝鮮に通商する要路なり。琿春は朝鮮咸鏡道に接し、浦潮斯徳に通商する樞要點なり。愛琿即ち黑龍江城は、江を隔て、露領ブラゴエチエンスクに相對する貿易場として知らる。内地首要の都邑には、貨物の保險事務を取扱ふ公署ありて、貨物運



搬の安全を計らしむ。之れ交通機關整頓せず、且つ馬賊の出沒等あり、其危害を避くる方法として、設立せられたるものなり。

## 第十六章 盛大なる製造業（現今は焼酎と豆油）

滿洲は土地廣大なりと雖も、人文未だ開けざるを以て、民生活計の度進まず、製造業の如きは、只日常の需要に應ずるに止まり。而かも其多くは、孰れも家内の手工に過ぎざるを以て、特に製造業と稱する程の價值なく、唯僅に焼酎及び豆油の二者を製造業と見るべきのみ。

焼酎は到る處、其製造舗あらざるはなく、日常消費額の多大なる、之に及ぶものなし。滿洲中最も熾んに製造せらるゝは黒龍江省にして、呼蘭及び白彥蘇々の二市のみにて、毎年四千五百萬斤乃至五千

萬斤に達す。其原料は重に高粱、黍、米及び大麥より製出し、其強度は、三十度乃至五十度にして、價格は約三合入り一瓶のもの、我十錢乃至十五錢に過ぎず。而して其品質の良好なるは、牛莊附近醸造のものを第一とす。

豆油は専ら大豆及び黑豆より搾取す、其製造方法は極めて簡單にして、恰かも本邦の種油を造ると異ならず。牛莊に於ては汽力を裝置し。盛んに製造する工場多し。而して豆油を搾取したる豆粕は、肥料として牛莊より毎年多額を本邦に輸入し來たる。

尙ほ此外、蓋平の製鹽、海城の阿片製造、各都邑近在の磚或は瓦製造、熊岳の製綿業等あれども、記するに足らず。要するに滿洲の製造業は、未だ甚しく幼稚の域を脱する能はざるものなり。



第十七章 豊富なる鑛脈(現今は殆んど死蔵)

滿洲の地、種々の鑛産物に富み、各種鑛脈の豊かなるは、歐米人の夙に知悉する所なり。而かも從來未だ採掘に着手せられざるもの多く、會々之あるも、孰れも舊來の方法を踏襲し、文明の利器を應用せず、充分の採掘を試みたることなく、空しく莫大の富源を死蔵するの感あり。

頃日露國大藏大臣は、大なる滿洲調査書二冊を公けにしたるが、其中鑛鑛に關する事項を意譯補註すれば、(一) 黒龍江省の北部クレーン河の支流ゲルトガ河の鑛脈は頗る豊富なり、千八百八十三年後の開掘に係り、初め露人の採取に着手するや、兩三年を経て此川に沿ひ、荒地の中央に人口一萬を有する市街を爲せり、然るに千八百八

十六年に至り、支那兵の蹂躪する所と爲り、次て李鴻章は官民共同會社を組織し、之が開掘に従事したり、其面積は巾百二十尺、長さ五里餘にして、四貫三百六十匁の沙中に凡そ一匁三分餘の金を出し、一人一日の採取額平均五匁五分、一ヶ月の産額四五百萬圓に上れり。(二) ウルガ河沿岸の沙金も豊富なり。(三) タヒラ河の支流に沿ひ、ブラゴエチエンスク市の近傍に於て鑛脈あり。(四) グワイサン鑛山は千八百九十四年民間資本家の開掘に係り、産金額は三百貫以上なり。(五) 寧古塔地方の鑛脈は、支那政府より哨兵を置き之を監視し、一私人の開掘を禁ぜり。(六) 綏芬河の低地に三ヶ所あり。(七) 圖們江の低地に數ヶ所あり。(八) 松花江の低地には百三十餘年前、既に發見せられたる鑛脈あり、蓋し之は吉林府の東北、三姓の東四十餘里の地にある、泰平浦及び皮溝兒と稱する豊富なる二鑛を指すもの



ならん。(九) ダヴォケチ金礦は千八百八十九年の發見に係り、數千人の礦業者入込みしも支那政府は其開掘を許可せざりし、併し千八百九十五年には五千餘人の礦業者來集し、二百貫餘を採取せり。(十) 長白山脈に伏藏せる金礦は、恐らくは滿洲中最大のものならん云々と。由是觀之、此一事既に露人が滿洲に垂涎するの偶然ならざるを知るに足る。

銀礦は遼陽東北凡そ一里なる賽馬集近傍を始め、多く南部に産し北部に少なし。鐵礦は海城、復州、岫巖一帶の地に多く、金州半島の海面なる鐵山島は、磁石鐵を含有し、船舶之に接近すれば、羅針盤に變動を來たすと云ふ。

石炭礦脈は盛京省各地に延布せり、北字河にある數ヶ所の半無煙炭は、水運に依り遼陽の西三里餘の所にある一小市牧字堡に來り、更

に營口、田庄台に送らる、一ヶ年四五千噸に及ぶ。又此石炭の海城に陸送し來たるは、何れも冬季にして、一日馬車百輛、毎季二千輛を下らず、一輛大概一噸を積載す、消費の途は酒造家、油房は其重なるものなり。又炭質の美良にして聲價あるは、北緯三十九度三十分、東經百二十一度五十分に當る李羅とす。老礦は金州の西南なる杏園島、大連灣の海濱、大洋河の東岸等なり。泥炭は金洲半島の東部に多く、貔子窩一帶の海岸に於ては、每家之を用ひ皆園内に積置す、且つ道路に沿ふて數里の泥炭沼あり、炭色は眞黒色なり。此外炭礦の有名なるは、黒龍江に注入するヂヤヂヤガン河より上流六里、三姓の附近牡丹江の沿岸、琿春の附近、圖們江の沿岸に産し、又吉林府より東十四五里なる俄莫賓索落に通ずる沿道、拉發河子及び吉林府の西南三十一二里の伊通州に産す。



又呼倫、貝爾の兩湖及び遼東沿岸には鹽、金州附近の鉛、松花江、嫩江の曹達等著名なるものなり。

滿洲山脈は、北米のアンデス、ロッキー二山脈の連亘する子午線と一帯なるを以て、東亞細亞山脈の形勢たる、米國の大山脈と其創造の同時なるを推知すべし。故に東西半球の異なるなりと雖も、大陸に於ける礦物は、符合せざるを得ず。鐵、石炭の如きは支那及び米國を世界に冠たるものとし、且つ英領バンコベル島の磁石鐵は、滿洲地方の夥多なる磁石鐵に比し、哥倫比亞と加里保尼亞は太平洋の對岸に於て緯度を同ふする、西藏、陝西、揚子江上流の金礦と相對する如く、滿洲の地は、諸種の礦脈に富めることは、此關係を知諒するときは、偶然ならざるを見ること、難きにあらざらん。

## 第十八章 無限の大森林(滿洲最大の富源)

滿洲の富源たるや、一々擧げて數ふべからずと雖も、其森林の如きは第一位を占め、又之が伐採業の如きは、利潤多きこと、他の諸事に比し最大のものならん。木材は人間生活上の必需品にして、都邑必らず需要あるを以て、清國の如き大邦の需要巨大なるは、言を俟たず。最も滿洲地方は、家屋を建築するに當ては、磚瓦を以て外部を構造すれども、内部の仕切、造作用又は柱梁等に材木は是非使用するのみならず、居常、卓子椅子を用ひ、又室内には、本邦の如く押入戸棚類を造作せざるが故に、日常の衣服器物を收容するには、皆木製の箱類を要するを以て、木材の需要は非常に盛んなり。是等の家屋器具の外、船車等に要する木材を合算するときは、實に驚く



べき額に達すべし。明治三十五年奉天吉林等の内地に在りて、需給相辨ずる地方を除き、清國海岸諸都邑の木材需要高は、約四千萬圓に上り、此内内國産三千二百萬圓、外國産八百萬圓の割合なりしと。清國に在りて大森林の所在地二あり。一は福建にして一は即ち滿洲なり。滿洲にあるものは、盛京、吉林兩省に跨る、長白山系の一大團地より斷續して、黒龍江省の興安嶺に亘るもの、及び鴨綠江を隔て、之と相對する、韓國方面の諸山の如きは、蜿蜒數十百里に跨り、山頂となく、山腹となく、將た巖谷となく、諸種の巨樹大木、蒼鬱として人跡未だ到らず、斧斤曾て入らざる、古代の森林に屬し、人をして富源の無盡藏なるに驚かしむ。而かも原木の獲得には、何等の代價を拂ふに及ばず、僅少の流動資本を以て、五割以上十割の利益ありと云ふに至つては、内地人の想像にも及ばざる所なり。

而して是等地方の材木原産地よりの搬出方面は、大東溝に送るものは鴨綠江に依り、吉林府には松花江に依り、奉天府には陸又は河に依り搬出す。鴨綠江畔に於ける森林の區域は、韓國に屬する分は鴨綠江に沿ふて、延長六十里内外、巾十里乃至二十里の廣袤を有し、清國の分は、延長は略相似たるも、其中は殆んど無限にして、其内長白山脈のみにて、二三百里に亘ると云ふ。而して是等の廣大なる滿洲の森林は、一個人の所有にも非ず、又團體の占有にも屬せずして政府の所有に歸せり、然れども之を伐採するに就ては敢て其許可を受くるを要せず、各人隨意に伐採して自己の所有となすを得べし。

鴨綠江上流地方に産出して、大東溝に輸送さる、樹木の種類は、紅松、杉松最も多く、黄花松、楸木、椴木、樺木其他の種類少なから



ずと雖も、其産額甚だ多からず、最も尊重せらるゝは黄花松にして、又應用の廣きは紅松、之に亞ぐは杉松なり。

(一) 紅松 一名果松と云ひ日本名五葉松、韓名柏子木と呼ぶ多くは料板に造り、丸太材とすること少なし。家屋の才、室内仕切り用、其他建築、船材、卓子箱類等用途非常に廣し。

(二) 杉松 一名白松、日本名は適當のものなく樅の一種なり、韓名檜水と云ふ。料板丸太材等に造り紅松と同じ用途あり又棟梁材に用ゆ。

(三) 黄花松 日本名落葉松、韓名イツカナムと呼び船材宮殿等、高貴なる大建築物の柱梁材に用ゆ。

(四) 楸木 日本名胡桃、韓名楸木と呼び、大低八尺の皮剥ぎ丸太材に造り、家具の原料に用ひ、建築材には用ひず。

(五) 椴木 我邦の桂の如きものにて用途は楸木に同じ。

(六) 柞木 日本の樺にして、器具用、車軸用に供せらる。

(七) 榆木 又山榆と云ひ我邦の榆なり多く車の輻材に用ゆ。

(八) 楚榆 南清にて檀木と書し日本ではミチバリと云ふ、荷馬車、乘馬車には必ず此軸木材を使用す。

(九) 以上の外、赤柏松、油松、彭松、寶瑪松、樟木、黄柏露等種種あるも、産額少なし。

滿洲の森林に關し、支那人の記す所を見れば

山地に材木多きものを窩集と云ふ。其窩集は東方は海邊より、吉林、黒龍江一帶に連接し、西は露西亞に至る。或は寛く、或は容く、叢材密樹、鱗次櫛比して、陽昇罕に曜し、松柏及び各種の大樹、皆類を以て相從ひ、他木を雜へず。林中落葉常に積



んで數尺に至る。泉雨水皆流る能はず。盡く泥濘となり人行甚だ難し。熊、野豕、貂鼠、黑白灰鼠等あり、皆松子橡實を以て食と爲す。又人參各種の藥料を産す。窩集の類は五十餘に及び、其内吉林方面にあるもの六、密古塔方面四十餘、何れも東北に在るもの多し云云。

出材の景況は、吉林省内なる二十一道溝より、初めて小筏の出るを見る。此より二十里を下れば、恵山鎮にして、尙ほ十里の下流にある羅暖堡に至りて、大筏に組換ゆ。之に由て見れば、鴨綠江を下る、大筏の發程點たる、羅暖堡より到着點たる大東溝までは、約百五十里なるを知るべし。

林相の狀況は、樹種の異なるに従て、高低三段の階級を爲し、彼此相混合して、生育し、翁鬱として晝尙ほ暗きの感あり。

第一段 最高の生育を爲すものは、針葉樹たる、五葉松、樅、檜

等にして、亭々、天を摩するの觀あり。之と併立して其伸長を

競ふものは、檜、胡桃、大葉楊等にして、其枝下十間に及ぶ。

第二段 楓類、サワシバ等の闊葉樹にして前者より稍低し。

第三段 灌木類にして、又其下位に生育せり。

滿洲に於ける天然林の狀況は、斯の如しと雖も、場所によりては、混生せる樹種中、或は針葉樹の多分を占むるあり、或は之に反するものもあれど、概して針葉樹の勝る所多し。

樹木の生育に就ては、我當局者が五葉松を伐採して、試みたる檢査成蹟あり、左の如し

目通直徑	一尺三寸九分
樹高	六十四尺
年輪	百三十六年



即ち樹木解剖の結果に依れば、生長の有様は、伸長に於て最初の二十六年間は、驚くべき遅緩なるも、生長は全高僅に二尺、其後の十年間は稍速にして三十六年生にて全高七尺五寸となる。爾後生長迅速となり、四十六年には其高さ、殆んど十五尺となれり。其後は同様の生長を繼續す。即ち全く陰樹の性質を備ふるものなるが故に、材量生長に於ても、二十六年頃は、一ヶ年に〇立方尺〇〇〇一なれども、四十六年生頃は、〇立方尺〇〇五三即ち五倍以上の生長を爲すに至る。

今や我國民の海外に事業を起し、國富の増進を計らざるべからざる秋に當て、是等の無限なる大森林あるを忘るべからず。

## 第十九章

### 鴨綠江の伐木事業（十六割の純益）

鴨綠江の伐木事業とは、材木の原産地たる、鴨綠江上流の森林に入りて、立木を伐採し、之を筏に組立て、鴨綠河を流下して、大東溝に搬出する事業を云ふ。明治三十五年の賣買價格は約四百萬兩に達し、内地の山林には、殆んど無限の富を藏し、需用は亦際涯なく、其利益たる清國人は十割、韓國人は十六割に當り、商工業上實に其比を見ざる莫大の利益あるなり。本邦人の此事業に着手せんか、前には日清戦勝者、後には日露戦勝者として、畏敬愛慕する優勝者の位置を以て、彼等に臨むものなれば、人夫傭雇其他作業上、種々の便宜を有し、殊に其資本は、零碎の金額を以て足るものにして、即ち彼の商工業と性質を異にし、資本の多寡に比例して、利當の割合



を増減せざるのみならず、小資本を以て、尙ほ能く經營せらるる事業なるが故に、一人若くは數人の合資を以て、容易に舉行し得るものたり。換言すれば鴨綠江の伐木事業に付ては、(一) 利益莫大にして(二) 元木代價を要せず且つ(三) 人夫の賃錢は成功拂ひの風習ある故(四) 小資本にて足り(五) 本邦人は作業上便宜の地位に在り(六) 其材木は北清の大需要者を有し(七) 賣買機關備はり賣却に容易なる等種々の便益あるなり。

伐木事業を始めんと欲せば、大東溝に於て從來執行せる方法を準用し、總て此地の習慣に依るを得策とす。然るときは、人夫の供給充分に、其賃金も略一定し、且つ成功拂ひにして、食料の給與、衣服及び道具の貸與等を爲せば可なり。而して此仕事を爲すに就ては、清國人夫の勤勉なることは、自己の仕事をすると毫も異なるなく、

備者被備者の干係等よりして、暇を盗む如き弊風あるを見ず。但し本事業を爲すに就て、一の注意すべき事は、清曆三四月の交に於ける、溪水漲溢に伴なふ流失材木の防禦と、筏乗下げの際に於て、無頼漢の横暴を防遏するが爲め、特に日本人の銃器類を携帯して、便乗するにあり。又伐木に新式機械の應用は不必要なり。是人夫仕事の分量は、時候の關係上、作業期間一定し、殆んど増減すべからざるのみならず、土地遼遠、其運搬に難ければなり。

扱て之より伐木業の順序を記さん。山林は政府の所有なれども、之が伐採を爲さんとするには、其許可を得るに及ばず、又原木代價を支拂ふに非ず、各人随意に山林に入り、恣に伐採し、自己の刻印を打込みたるもの、即ち其所有に歸するなり。而して其伐採木は、大東溝に至り多少の税金を納付する成規なれば、税金即ち原木代價



と見るべきものなり。而かも其納税者は買主なるを以て、賣主たる伐採業者は、只資本と勞力を提供するの外、何等の負擔なし。但し韓國領土にありては、前記納税の外、山地に於ても納税する義務あり。

伐採及び運搬事業は、人夫を雇入れ、之を使役して施行するものにして、殆んど一ヶ年以内に完了す。該事業に従事する者にして、相當の資本ある者は暫く措き、其無資本者に至ては、數人協同して一團と成り、團々相依り數多の團體を作りて入山す。而して資本は、一團中の一二の者、僅に衣食を辨ずるの費用を出し、以て同志を引卒するあり、或は大東溝に在る林木仲立業者たる行棧より、費用を前借して従事するあり。此場合には行棧は往々無利子にて貸與することあれども、他日必ず其行棧に依頼して、材木を處分する義務を

生ず。

一筏の賣揚代金一千二百圓以上に達するものに要する、資本金は驚くべき少額にて支辨し得るなり。即ち之に對する資本金總額は五百兩以内なるも、實際須要の金額は、僅々二百七十八圓内外にて足れりとす。是此種の事業は、勞力を主とするも、其賃錢たる管に低廉なるのみならず、其支拂は事業終了して、筏を賣却したる後に支拂へば可なる習慣なるを以てなり。即ち事業當初の費用は、少額なる器具購入費と、労働者の衣食費あれば足るなり。事業期間は、清曆九月に大東溝を發程して入山し、翌年六月の頃、歸り來るを以て普通とするが故に、其間十ヶ月を要するものなれども、伐木を賣買し終るには、尙ほ一ヶ月位を要するを以て、結局本業は一ヶ年懸る勘定となるなり。山地に於て一筏を作るべき材木の



伐採造材に要する人夫数は、四人乃至五人を常例とす。蓋し山地に於ける、作業期間に一定の時期ありて期限せらるるが故に、猥りに造材高を増減する能はざるなり。又一筏の乗組員は、筏の大小に由り多寡あれども、普通六人乃至八人とす。

人夫の組織は簡單なれども、山地操業と筏乗下げの場合には、多少異なれり。即ち山地操業の際は、一事業期間に一筏を作るの目的を標準として、一組の人夫数を定むるものにして、人夫頭一人に付き三人乃至四人の常用人夫を附屬せしむ。此人夫頭は伐木造材等の指揮監督を爲すの傍ら、自らも亦勞働するが故に、伐木事業に通曉するのみならず、又筏の操行にも熟練せるものなり。筏乗下げの際は、人夫頭一人、其他五人乃至七人乗組み、其内より炊事雑用等兼務の者を定む。而して筏乗下げの時は、上流地方に於て、臨時雇入を爲

すものなるが、之が雇入に付ては、常に不足を告ぐるが如き憂ひなしと云ふ。

人夫は賃金の外、尙ほ其食物を給與し、且つ一ヶ月の内一日及び十五日に饗應するを以て常例とし、此外衣服の貸渡を爲す。而して賃金の支拂期日は、前にも述べたる如く、大東溝に於て筏を賣了したる時に支拂ひ、其以前は彼等の請求に應じて、多少の小遣錢を貸渡すことあり。賃金の支給は、左の區別によりて、雇入るゝものなり。

一事業期間従事の人夫頭

八十一二圓を普通とす(大抵通常人夫の倍額)

一事業期間従事の通常人夫

一ヶ月四圓乃至七八圓

上流にて臨時雇入の人夫頭



三十四、五圓乃至四十五、六圓(大抵四ヶ月間使  
用するものとす)

上流にて臨時雇入の通常人夫

二十二、三圓(是亦四ヶ月間使  
用するものとす)

食物は頗る粗食にして、唐黍の粗粉を主食とし、鹽、豆類を副食物とす。一人一ヶ月一圓五六十錢にて可なり。又一日十五日の要應には、豚肉に焼耐類を供す、其一回分は二三十錢あれば足る。而して清國の勞働者は、使用中雇主又は人夫頭に對し、抵抗又は紛議を來すが如きこと殆んど絶無にして、使役し易きが故に、事業圓滑に進行し、制裁を加ふるの必要なきも、一旦役に組立てたる後、出水其他の原因に依り、材木を流失したるときは、賃金を支給せざるものとす。即ち或時期間食物のみ支給せられ、無賃にて勞働したる結果となるなり。故に彼等は慎重に操業するが故に、材木の流失等は殆ど稀なりとす。

伐木事業は清曆十月に着手するを普通とし、立木は斧を以て伐倒し其樹木の長短大小に應じて、造材の種類を定め、其場所に於て造材の寸法に適應の長を有する丸太材に挽切るなり。清國人が鋸を用ゆるときは、一挺を必ず二人にて挽く。而して此丸太材は、管流しを爲すに適當なる溪流の邊まで索出するなり。此事業は三ヶ月間、即ち十一月に始め、翌年一月に終るを普通とす。之を索出するは、鐵環を打込み、牛を用ゆ。又已むを得ざる場合は馬を以て代用することあり。此牛馬は皆山地に於て借入るなり。其牛の借入賃は此三ヶ月間一頭に付十五六圓なり。次に造材したるものを管流しする時期は、大抵三月の交に於て爲すものにして、此時季は降雨に伴ひ、融雪を促がし、溪水漲溢して、積置きたる材木を流失すること往々之



あるを以て、最も警戒を要す。筏の構造は大小種々あるも、歸する所は、造材の種類即ち角材と丸太材の相違あるにより生ずるなり。而して流下する筏の中央には小屋を造り、人夫の寢食用に供し、其前後には三挺乃至四挺の楫を附して、操行するなり。筏には本字號及び新字號の區別あり

一本字號の筏 同一事業者の手に依りて、構造せられたる、筏を云ふものにして、其造材寸法、材質等一様なるを以て、自然上等にして、大東溝に於ける、價格も亦貴し。此種に屬するものは、單に筏と稱し、鴨綠江を流下するもの、大部分を占む。一雜字號の筏 流失木を拾集して、組立てたる筏を云ふ。其寸法品質等、種々のもの混合し、品位不定なるにより、價格も亦低廉なり。其數量は勿論小額なりとす。而して之が賣買は、安東

縣若くは、韓國義州に於て行ひ、大東溝に至るを忌避せり。蓋し元來流失木なるが故に、大東溝に至れば、先きの所有主と紛議等を惹起するに由る。

伐木造材用の器具は、皆大東溝にて購入す、其種類及び代價左の如し。

斧	一挺	一圓三十錢	立木伐倒し用
鋸	一挺	四五十錢	玉伐り用
銼子	一挺	一圓三十錢	材木削り用
鑿子	一挺	四十四五錢	孔を穿つに用ゆ
抱鉤	一挺	十五六錢	窓口なり
鐵環釘	一個	十錢	目方買なり繩を結付くる時に用ゆ
麻	百斤	七圓	繩に作るなり

伐事業收支の計算を見る時は、其收益の多きに、何人も驚く所なれども、樹種の良否に因りて、收益に多少を來たすことを忘るべから



ず、是れ均しく勞力を費して、製出したる材料は、假令同額なるも、其價格たる紅松は、杉松の殆んど倍額なるが故に、收益に至りて非常の差違を生ずる如きは是なり。今左に、明治三十三年七人組合にて、人夫十一名を備入れ、大東溝より入山し、四筏を造り、尙ほ其流下の際上流にて人夫頭一名、人夫五名を備入れ、一筏六人乗り、總計二十四名にて、翌三十四年大東溝に歸來し、賣却したる收支精算を掲ぐれば

(第一) 支出合計金千八百三十五圓十錢

内 訳

- (イ) 原木代金 之を要せず
- (ロ) 人夫賃 千八百三十三圓二十錢
- (ハ) 食料費 三百四十四圓五十二錢
- (ニ) 藥費 四十五圓八十四錢

(ホ) 器具買入 四十七圓十錢

(ヘ) 牛借入料 九十七圓四十四錢

(ト) 雜費 百十七圓

(第二) 收入合計金三千三百四十四圓八十錢

(第三) 差引純益金千五百〇九圓七十錢

是れ金利等を差引かざる計算なれども、其資本金に對し、八割二分強の利益ある如きは、世上普通の事業に於て、見る能はざる所なり。從來日章旗を建てたる筏に對しては、馬賊の如きも、之に危害を加へしことなしと云ふ。況んや今回の日露戰爭に於て、更に威武を輝かしたるに於てをや。

第二十章 重要なる牧畜(廣大なる地積在り)

家畜は馬、騾、驢、牛、羊、豚、犬、猫の類あり。馬は體格小なれ



ども強壯なり、騾は能く辛勞に堪へ、牛の大なるものは耕耘に使用す、羊は大なる尾毛を有し頗る痴鈍なり、犬は獵に用ゆべく、其質鋭敏なるも勇猛の性に欠く。

牧畜に好適の地は、松花江、嫩江沿岸の如き頗る廣濶なれども、未だ使用せられざる地甚だ多し。牧畜は南部より北部に於て、顯著にして、露領に近きアルグン河沿岸の西北部、齊々哈爾以南の地及び嫩江に沿ひ、拉發站よりニンヂヤモまでの間に産する家畜は、品質一般に良好なり。

住民の食用としては、重に豚を用ひ羊之に次ぐ。豚は如何なる小家族の家にてても、少なくとも十數頭を養ふ。家畜の秣草は一般に之を栽培せず、野草盡くるか、或は雨雪の爲め之を獲る能はざる場合は、大豆を壓搾して其糞に充つるを常とす。

### 第二十一章 漁業と獵業（山水の産物亦豊富）

滿洲は、黒龍江、松花江、嫩江、遼河を始め夫に注入する支流甚だ多きを以て、水中の産物も亦頗る豊富なり。各地の河濱には、小屋を造り常に漁釣を以て専業とするものあれば、此農夫の收穫後之に従事する者も多し、漁獲物は主として其地方に於て消費し、遠隔の地に輸送するもの殆んど無し。之れ鹽漬に爲さんとするも、鹽の品質粗悪にして且つ高價なるに因る。

魚類は鯉、魴、鯪、鯽、細鱗魚、烏子魚、發綠魚、鱒、鱖、鯢、鱈、鮭、鰻、鰱、鯪、鮠等なり、鯉魚は興凱湖、松阿察河、烏蘇利江に産し、大なるものは八九尺に及び頗る美味なり。鮭魚は住民食物の必需品にして、其季節に至れば、小河流は總て鮭魚を以て充塞され、



逸して岸上に飛揚し、自ら枯死するもの多し。土人は鮭の皮を精製して、夏季用の衣服、冬季用の鞋を作る、其技極めて巧なり。又毎年三四月解氷の頃、蒸汽船の進行に際しては、魚類の車輪に觸れて死傷する多きを見ても、其魚類に富めるを立證し得べし。

滿洲の森林には、各種の野獸棲息し、獵獸を業とする住民多し。獸皮は滿洲産物中の大なるものなり。其種類は、貂、虎、豹、山羊、黄羊、密狗、熊、麋、狼、麝、兔、栗鼠、松鼠等にして、虎は印度ペンガル産と類を同ふし、頭部より尾端に至る凡そ九尺乃至一丈のもの珍らしからず、虎皮は到る所の市邑に鬻ぐ。毛皮中最も貴重せらるゝは貂皮にして、貢納品と爲り、毎歲規定の數を必らず帝室に致さざるべからず。毛質は緻軟にして金色を帯ぶるものを貴ぶ、色は黒色、鮮褐色、赤色、黄色等あり、貂皮に次て貴きは栗鼠皮、松

鼠皮なり。又鹿角は一種の藥劑を製する原料として、滿漢人は一般に之を珍重す。

### 第二十二章 滿洲對外國貿易(最優勝者は我日本)

滿洲對諸外國との貿易額は、年々進歩の道程に在り、殊に日本に對するものを最も顯著なりとす。抑も我國の對支那貿易は、北米合衆國に亞て第二位に在り、此内滿洲に對する者は、上海天津等の諸港を經由するものを合するときは約四割に上る。將來海陸交通の便、益開くるに於ては、貿易額も亦一層の進歩を來たすや疑ひなき所なり。

滿洲の貨物を吐放する港灣は、牛莊港を第一とし、芝罘、天津之に亞ぎ、又近頃開かれたる秦皇島も將に盛んならんとす。今是等貿易



港に於ける、明治三十五年度の、輸出入總額、對日本輸出入額、日本以外の諸外國貿易に對する其比較を示し、我國の對滿洲貿易上に於ける地位を示さん。

(備考) 表中の金額は海關兩を我貨幣に換算したるものなり

▲輸入(諸外國より滿洲へ)

	牛莊港	芝罘港	天津港	秦皇島
本邦よりの直輸入	二、三八九、〇二〇	五、八一八、四七三	七、一七五、二〇六	一、二七四
臺灣よりの直輸入	一〇、八三四	一七、四九一		
外國よりの總直輸入	七、〇〇三、六六〇	一三、五三九、五五九	二四、六九二、四九六	五三四、六五二
割合(臺灣を除く)	四割〇四	四割六四	二割九一	零割〇二
上海其他支那諸港よりの間接輸入	一六、九八三、七四二	一三、六〇〇、三九六	四五、六〇一、四九四	二、七五四、五二六
香港經由の間接輸入	三、八八二、六六四	五、六三七、三五九	四、九一四、四八九	一〇〇、八九〇
以上二項即本邦品と外國品の間接輸入額	二〇、八六六、四〇六	一九、二三七、七五五	五〇、五一五、九八三	二、八五五、四一六

▲輸出(滿洲より諸外國へ)

	牛莊港	芝罘港	天津港	秦皇島
本邦への直輸出	一〇、四九四、〇六五	一、八七一、七〇三	三五〇、五〇四	
臺灣への直輸出				
外國に對する總直輸出	一一、四四〇、七七三	四、〇四〇、九〇四	二、二二二、三六二	一五六、〇〇三
割合(臺灣を除く)	九割二八	四割六三	一割五八	
支那諸港への輸出	一一、五一六、九二〇	一一、〇四四、八九八	一五、七六一、六一五	一、三四八、七五五
香港への輸出	七九一、七七五	二、〇一六、二七二	八〇一、〇七五	八五、八三一

由是觀之牛莊と云ひ、芝罘と云ひ、我國は優勝の地位を占め、殊に牛莊の輸出に至ては、殆んど日本の獨占とも謂ふべく、實に九割二分八厘を占む。

各港の輸出重要品を擧ぐれば大豆及び其他豆類、豆粕、獸骨、麻、包蓆、胡麻子、柞蠶絲、藥材、絹紬、蓖麻子油、粟、小麥、豚毛、馬毛、毛皮、線綿及び生綿、麥稈真田、梧桐、雞卵、甜瓜子等にし



て、此内本邦へ輸出せらるべき重要品にして、其明治三十五年度に係るものは、

品目	全清國より		諸外國に對する重なる輸出港	
	我國に輸入	牛 莊	芝 罘	天 津
豆 粕	一〇、四八四、一九四	六、五六五、八六九	五三八、八五八	
豆 類	四、六一六、六二二	二、九三八、八〇一	六九、六八四	四、九九六
榨 蠶 絲	一、二五一、四一〇	一三六、〇五七	五六一、一三三	
羊 毛	三七七、四四二			五七〇、三八四
獸 骨	三九九、四六〇	四、七二七	二、〇五六	四五、七五〇
胡 麻 子	五五六、四七六	一五六、六四四	二〇、七三三	

(備考) 本表中原材料は仕向地の我國なるを明記せずと雖も、我國輸入の數字に就て考ふれば、羊毛、胡麻子を除く外は、全部本邦に向て輸出せられたるものと見るべし。

又我國より滿洲其他北清に對し輸入するものにして、年額十二三萬圓以上のものは

綿 織 絲	六六六、五〇一	三、七八六、一一〇	二、四四一、〇三六	六八、七二七
燐 寸	一八九、〇六九	七〇六、七八七	一、〇四五、二九五	
天 竺 巾	七一、一八〇	一四四、九三一	六四〇、四八九	
石 炭	九六〇、六二三	三〇四、七四五	七、六三二	
シ ー チ ン グ	一九、七四四	三六、八九二	二一一、〇一八	
昆 布	三一、七三二	二五五、六三九	二〇四、一七六	一、五六二
浴 布	一八、六一一	一五、一一〇	一〇七、〇六八	
鈕 釦	二六、六九三	二二、七一〇	一〇七、九九九	一、一一三
紙 卷 煙 草	一七四、九五二	一七一、三九一	五二四、一二七	九、三九六
洋 服	三〇、六六七	二六、八九九	一七一、三二三	三、六一二
玻 璃 製 品	三七、四一三	二〇、二四八	一〇二、四〇四	六二八
洋 燈 類	一九、八九二	一五、四七三	一一五、五四三	四、四九三
鐵 鑄	二三、〇七三	一九、〇六三	一二〇、〇〇五	八、〇四七
石 鹼	六九、二八五	七三、五三六	九六、九九七	一一、三四八

(備考) 本表中綿織、燐寸、天竺巾、シーチング、昆布、浴布を除きたる他品は本邦品七八分、外國品二三分の割合と見ざるべからず。



以上は主として、日本對滿洲貿易の現態に就て、述べたるものなるが、更に滿洲對西伯利亞貿易の狀況を掲げて、參考に供せん。滿洲より浦沙斯德に通ずる要路たる、琿春と露領ボルターフスカヤ（南烏蘇利）境との貿易は、滿洲に取りては、浦潮斯德、ボシエツトを相手とし、露國にとりては吉林府、寧古塔を相手とする貿易なり。最近三年間の輸出入額を見れば、是亦逐年増加の傾向あること、左の表に依て明かなり

年 度	露國より輸入	滿洲より輸出	合 計
一八九七年	一、三三五、六七〇	七六四、七七五	二、〇九〇、四四五
一八九八年	八二三、四八五	一、〇二六、三七五	一、八五〇、三六〇
一八九九年	二、二七七、六三九	一、〇五七、二九五	三、三三四、九三五

而して滿洲より輸出する重なる品は、牛、羊、豚、豆油、屠肉、大豆、黍、麥、煙草、燒酎にして、又輸入品は、織布、鹽、魚類、昆

布、生皮、熟皮、松實、密柑、麥粉、雜穀、雜貨等にして、此内には本邦製の莫大小、玻璃器、陶磁器、燐寸、紙卷煙草、洋燈、洋傘、金屬製品等少なからず。次に又、里龍江省の愛琿と、其對岸ブラゴエチエンスク市との貿易を見れば、最近三年間に滿洲より輸出せられたるものは

年 度	輸出總額	禾 穀	家 畜
一八九七年	一、九〇二、七一九	四九八、五二〇	一、四〇四、一九九
一八九八年	一、六一二、七七四	四〇六、六四四	一、二〇六、一三〇
一八九九年	一、五四五、〇〇〇	一八四、九八八	一、三五〇、九六〇

又黑龍江と烏蘇里河との合流點にあるハバロフカ市と滿洲との貿易は、從來微々として振はざりしが、近來東清鐵道の工事起りたる爲め、之に要する材料及び其從業者の日常品を供給する關係等よりして、俄然長足の進歩を來たし、千九百〇一年には、滿洲よりの輸出



三百二十餘貫、又滿洲への輸入六百八十貫に達し、穀物、家畜を滿洲より輸出し、鹽、乾魚、石油、金屬製品、車輛、織物等を露領に仰ぐに至れり。

### 第二十三章 滿洲の金融機關(意想外の發達)

滿洲に於ける金融機關は意想外に發達し、大小銀行の本支店は滿洲の各都邑は勿論、遠く支那本部とも脈絡を通じ、金融を圓滑にし、商業取引を助成し毫も滯滞を來たすことなし。支那銀行の組織は到る所大同小異にして、其營業は一個人若くは數人の組合に成るものとす。故に茲には主として開港場たる營口の金融事情を詳述し、以て一般の參考たらしめんとす。

營口には我横濱正金銀行支店ありて、彼我の商業取引を便にするあり。又支那銀行としては、銀爐、票莊、銀莊、錢莊等の外、當舖と稱し我質屋と同類のものありて各金融疏通の任に當る。

銀爐又一に爐房と云ひ、滿洲に於て最も有力なる金融機關なり。其業務は自ら銀塊を購入し、元寶銀を鑄造して銀莊に賣出し、或は銀莊及び各商賈の依託を受けて各種の銀兩又は銀塊と改鑄して元寶銀となす。乍併金融上銀爐の必要なるは、尙ほ是以上の效益ありて存するなり。即ち甲乙兩者の媒介者となり貸借關係を帳簿上決濟することとなるが其詳細は後に述べん。

票莊又票號と稱し、官私の現銀を爲替し一定の爲替料を徴するを以て本業とする故に、又滙票莊、兌滙莊等の名稱あり。資本金は少なきも三四十萬圓、多きは五六百萬圓に達し、南北清到る所に支店又は代理店を設置し、敏捷に事を處す。又官私の預金を引受く、但し



官金の爲替は無料を以てする報酬として官金を大抵無利息にて預り  
 確實なる事業に放資す。其爲替、預金、貸付を以て業務とする點よ  
 り見れば純然たる銀行業を營むものなり。

銀莊は惟票號若くは銀號とも呼び爲替、貸付、預金等の業務を營む  
 こと票莊と異ならず。唯前者に比し資本金少なく、大抵五六萬圓よ  
 り五十萬圓位を極度とし、從て營業範圍狭少なり。

銀莊又錢舖と稱し、銀兩、弗銀、銅錢等の兩替するを本務とすれど、  
 實際は票莊、銀莊と同じく貸出預入を爲し、又錢票と稱する銅錢引  
 換の小切手を發行し、宛然小商人に對する銀行なり。資本金は大な  
 るものには二三十萬圓のものあれど、多くは五六千圓乃至二三萬圓  
 を普通とす。

當舖は本邦の質屋にして、其資本金の大なるものには百萬圓以上の

ものもあり。土地家屋の不動産を除き、衣服、器具、米穀等の諸物  
 品を抵當として、資金の貸附を爲す。

公估局は矢張銀行と同じく私人の設立するものにして、銀兩の秤量、  
 品性の批定等を以て業務とす。滿洲の如き通貨の錯雜を極め、濫鑄  
 行はるゝ地に於ては、必要缺くべからざる金融上の一機關なり。

支那銀行は當座預金に對しては利息を附せざるを原則とす。其一ヶ  
 月以上の定期預金に對しては、正銀千圓に付き一ヶ月十二圓位、過  
 爐銀なれば一ヶ月五圓位の利息を附す。又貸附金は、大抵一ヶ月以上  
 一年までの期限なれば、正銀千圓に付き一ヶ月十七八圓より二十圓、  
 過爐銀なれば七八圓の利息を徵收し、日歩貸は一切行はれず。割引  
 は行はれざるにあらざるも甚だ稀なり。而して決算期は毎年末を以  
 て之を爲せども、利益配當は三年目一回を普通とし、手代の賞與金



は純益の三割乃至四割を與ふ。

金錢授受の方法に三あり。一は現元寶銀を以て取引するもの、二は過爐銀を以てするもの、三は過爐現銀を以てするものにして、一は讀んで字の如く、現實の元寶銀を提供して取引を爲し、三は取引に際し之を用ひんとするも用ゆる場合なき故に普通商人より見れば寧ろ無用の長物たる感あり。其専ら行はるゝは第二の過爐銀にして、是は全く無形のものにして一片の紙片すら授受せず、銀爐の帳簿上に於て決済せらるゝ甚だ調法のものなり。三は一の現元寶銀より、運送費及び鋳造費を引去りたるもの即ち過爐銀に對する現銀となるなり。

營口始め滿洲に於ける取引の多くは過爐銀にして、諸貨物に對する相場も、亦之に依て建てらるべきものなるを以て、商業取引を爲す

者は熟知せざるべからず、過爐銀の効用は我邦に於ける定期支拂手形と異なるなく、其取引を媒介する者は銀爐なり。例へば茲に甲乙兩商人ありて甲より乙に向け千圓の支拂ひありとせんか、甲は口頭にて吾は丙銀爐と取引あるを以て、代金は其處より受取り呉れと謂ひ、一方には人を丙銀爐に走せ、自己の權利に屬する銀額の中千圓を割いて乙商人に振替へんことを要求す。此時甲乙共に丙銀爐に取引あるものなれば、銀爐は甲より何等の證據物を取るなく、直に帳簿上の書替を爲し、千兩を乙商人の權利に移し、貸借關係を結了せしむ。其便利なること我邦の諸銀行に於ける取引と毫も差違あるなく、只我は手形を發して證據と爲し、彼は口頭を以てするのみ。然れども我手形は何時現金引出を求め來たるや計り難きを以て、之に對し相當の豫備金を要すれども、彼は之に反し一年四回の勘定期を



定め總て決算を此期に於て爲すも、通常商人は銀爐に向て現元貨銀を取付くるは稀にして、只次期の勘定期に於ける過爐銀に付替を爲すのみなれば、此決算は銀爐相互間に手形を交換し同じ手續を以て帳簿を整理し、其差額を現銀にて支出すれば足る。

過爐銀の決算期は陰曆三月一日、六月一日、九月一日、十二月一日の四期なり。若し期限至らざるに現銀の引換を請求せんと欲せば、恰も期限前に手形割引を爲す如く相當の割引料を出さざるべからず。其割引歩合は加色と稱し、加色は日々市中に於て定まるものにして、現銀の取付大なる時は高く、少き時は下落し、平常は勘定期の翌日最も高く、漸々次期の勘定期に近くに從ひ下落し、遂に皆無となる。貨物の相場は一に之に依て表示せられ、綿絲五十兩と云へば、即ち過爐銀より加色を控除したるものなり。本邦より貨物を輸入せんと

する者は、大に此相場建方に注意せざれば、損失を來たすことなかりあらず。

## 第二十四章 滿洲の通貨（外來人の特に注意すべきもの）

取引上に於て注意すべきは通貨の種類なり。通貨の區々にして相場の日々高低あるが爲め、其換算上に相違を生ずるが故に、取引に際しては、豫め何種の通貨に依るかを約定すべし。清國の通貨は兩を以て本位と爲せども、本來完全の鑄貨にあらずして、寧ろ物品視せらるゝの感あり。其兌換銀券の如き遠慮なく、之に文字を記入し、却て其之あるを信用ありとせり。而して大取引には通例馬蹄銀を用ゆれども、又墨西哥銀貨の勢力次第に加はり、往々之を使用するに至れり。而して海關稅收入の標準を爲すものを海關兩と稱し、其端



數を分、(清語にて錢と稱す)分、厘に分つ。即ち十厘を一分と云ひ、十分を一匁即ち十錢と云ひ、十匁を一兩と云ふ。一兩は我約一圓三十一錢に當る。海關兩と各地方に於ける通貨との比例は、凡そ左の如し

壹百海關兩は

上海	一二・四〇〇	蕪湖	一〇四・一六〇
廈門	一〇一・七五〇	九江	一〇四・三七〇
芝罘	一〇六・四〇〇	牛莊	一〇八・七〇〇
鎮江	一〇四・二六〇	溫州	一〇三・〇〇〇
福州	一一〇・〇〇〇	寧波	一〇五・八三〇
漢口	一〇八・七五〇	北海	一一〇・五七〇
淮河	一一三・七六〇	汕頭	一一〇・一五〇
宜昌	一〇九・六〇〇	天津	一〇五・〇〇〇

營口に於て普通使用せらるる貨幣を大別すれば (一) 元寶銀 (二)

大銀貨 (三) 小銀貨 (四) 銅錢の四種あり。元寶銀は馬蹄の形に似たる所謂馬蹄銀にして、各私人の銀行即ち銀爐に於て勝手に之を鑄造し、其量目の如き標準は五十三兩五匁なれども、其小なるものは五十一兩より、大は五十四兩に至り甚だ一定せず。取引に際しては一々之を秤量す。元寶銀一個と他種の貨幣とを比較して、其價格を示せば、其大小に依り著しき差違あり。即ち左の如し

最高	大銀貨七十八元五十錢	七十五元
	小銀貨七十九元五十錢	七十六元
	銅錢八吊六〇二	七吊八〇〇
最低		

大銀貨の種類は頗る多し。墨西哥銀貨、日本銀貨、清國各省鑄造の一元銀貨は其重なるものなり。皆補助貨として支障なく通用するも、各相場ありて一様ならず。通常遼河開河中は輸入貨物の税金は、兩



銀及び墨銀に限るを以て、墨銀の需要多く、従て其價格も高く、他の貨幣に比較し、常に百弗に付き一弗乃至二弗半の差違あるも、遼河一たび結氷するときは、外國との交通杜絶し、貨物の取引も内地に限局せらるゝ時となれば、墨銀は賸造多き故、日本銀貨及び支那銀貨を選び、墨銀の價格下落す。小銀貨は種々あるも、大銀貨と異り、其價格は各種を通じて一樣なり。税關若くは郵便局等の官衙は、其價格を定め、一回一圓以上の授受を爲さざる如き制限あれども、普通商人に在りては、無限に使用せらる。銅錢は所謂制錢にして、康熙或は乾隆通寶と刻せる一文錢なり。滿洲内地の重なる通貨は、制錢と各省鑄造の銀貨にして、前述せる大銀貨、小銀貨の類なり。而して滿洲の如き一劃内に於ても、盛京、吉林、黑龍江の三省各其價格を異にし、不便此上なし。即ち盛京省

に於ては、制錢十六文を一百錢と稱し、百六十文を一吊錢と爲す。吉林黑龍江の兩省は五十文を一百錢とし、五百文を一吊錢となせり。然るに滿洲一帯に制錢少なきを以て、盛京吉林兩將軍は、各鑄銀局を創設し銀貨を鑄造す。其種類は一元（我舊一圓銀貨に同じ）半元（五十錢）二角（二十錢）一角（十錢）半角（五錢）の五とす。此銀貨と銅貨との間には、一定の價格を附して取引に供す。即ち左の如し

- 銀貨一元
  - 盛京省にては
  - 吉林省にては
  - 黑龍江省にては
- 銅錢六吊六百錢
- 銅錢二吊二百錢
- 銅錢二吊二百錢

以上の比例に依れば盛京省の一角は六百六十錢、吉林黑龍江兩省の一角は、二百二十錢なり。而して他省鑄造の銀貨は通例一割引にて流通するものとす。一兩は大抵一元四角餘に相當するも、時に市價



の高低ありて一定せざるのみならず、各地皆其價格を異にせるを以て、兩替店は馬蹄銀と銀貨との交換は喜んで之に應ずるも、銀貨と銅貨は公定價格ありて其間に毫も利する所なきを以て、交換を肯んぜざる者多し。

吉林省には承衡官帖局なるものありて紙幣を發行す。其種類は一吊一百錢券（五十錢）二吊二百錢券、四吊四百錢券、六吊六百錢券、十一吊錢券の五にして、税金其他一般の取引に授受せられ、銀貨銅貨に比し携帶に便なるを以て廣く流通す。又琿春には大銀塊を零碎に切りたる、所謂碎銀なる一種の通貨ありて、梯用品の購入等の小取引に秤量して使用せらる。又哈爾濱、旅順等の露國勢力の大なりし地には、露國銀貨、露國紙幣等の流通を見たることあたりたり。

## 第二十五章 滿洲の尺度（錯雜混交を極む）

清國に於ける度量衡の錯雜紛糾せることは、實に意想の外に在りて、米國人ウイリヤム氏の支那通商案内記に記する所によるも、沿岸各地に用ゐる支那尺の種類は總て八十四種あり、今若し内地各地方に用ゐるものを悉く調査せば、其數百種以上ならんと云へり。之が爲め商業取引上少なからぬ不便を來たし、貿易の發達を阻礙すること尠少ならざること、今更云ふ迄もなし。今税關に於て用ゐる、所謂廣東尺を我邦の尺度に比較する時は左の如し

一里（リ） 我五町十五間

一丈（チャン） 我一丈一尺七寸

一尺（チ） 我一尺一寸七分



一寸 (ツアン) 我一寸一分七厘  
 一分 (フン) 我一分一厘

又衡量は左の如し

一擔 (ピクル) 我十六貫九十九匁六分  
 一引 (イン) 我三百三十一匁九分九厘五毛  
 一斤 (カチ) 我百六十二匁四分三厘三毛  
 一兩 (リヤン) 我十匁一分五厘二毛餘

(備考) 我百斤と清國の一擔とは商業上同一に看做すの習慣なるも實際は二百斤に付百二十八匁の差あるに依り多量の貨物に付ては換算するを可とす

量衡の異なる例を擧ぐれば滿洲のみにては營口に於ける百斤は

奉天	九十八斤	遼陽	九十五斤
海城	九十七斤	蓋平	九十三斤

田庄臺 百〇五斤

營口の秤一斗は

奉天	一斗一升六合	鐵嶺	一斗一升
寬城	九升	通江	九升
法庫門	一斗七合	海城	一斗三合
蓋平	九升五合		

取引を爲す者は、能く克く注意せざれば、意外の不覺を取ることあるべし。

### 第二十六章 滿洲の商店(仲買と巨商と小賣商)

滿洲及び支那本部にある商賈の種類を大別すれば (一) 行棧即ち仲買業 (二) 字號商即ち大店 (三) 零賣商即ち小賣業の三種とす。之